Philippine Camp 2013

reported by FIWC kyushu

Time:2013.2.21~3.21

Place:BRGY Sandionesio,Matag-ob,Leyte

FIWC 九州 kyushu

もくじ

1.はじめに

2.FIWC 九州とは

3.重要人物

4.ワーク地・訪問地

5.活動日程

6.ワーク報告

7.生活状況

8.各係報告

9.T シャツ

10.他己紹介

11.感想

1. はじめに

キャンプが動き出したのは 2012 年 6 月。そのときからずっと、このモニュメントをつくることを夢見ていた。下見キャンプが終わったあと 12 月には新しいメンバーが加わり、それからは 16 人でキャンプを創り上げてきた。
今回のキャンプテーマは

「つなぐ～Country Road~」

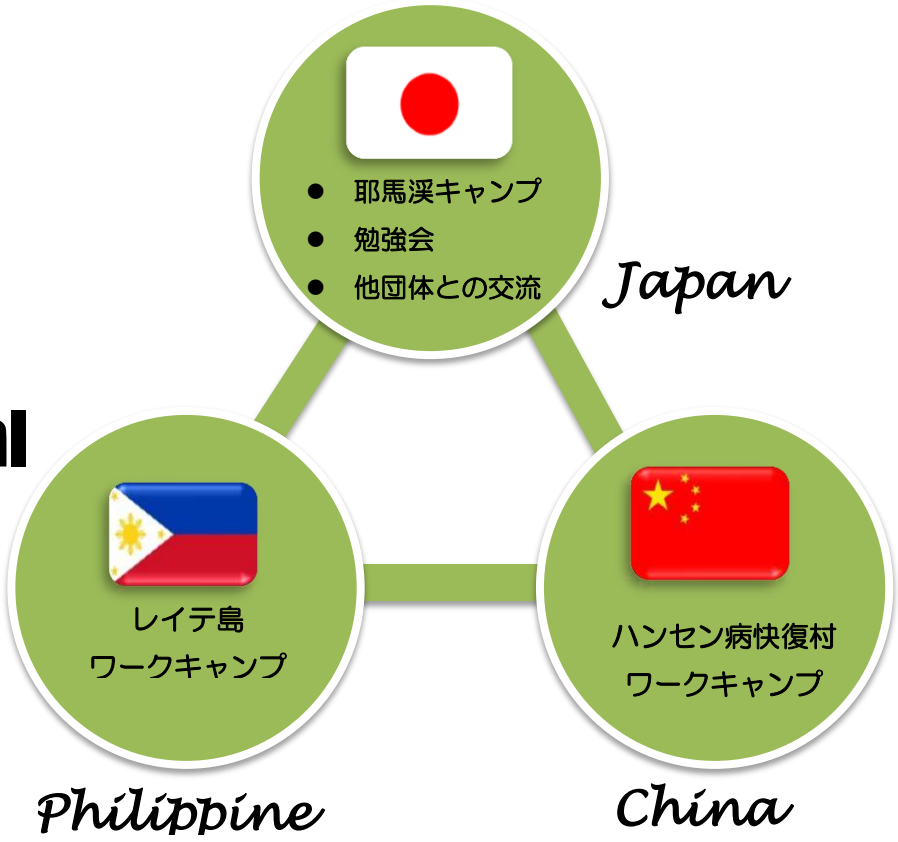
世代を越えて作った道が受け継がれますように。いっしょに過ごした日々が私たちと村人の心にずっと残りますように。この道が村人にとっても、私たちにとっても「故郷の道」となりますように･･･。そういう想いが込められている。

私たちだけでは不十分、村人だけでも不十分。でもいっしょになれば周りの人も加わって大きな力になる。そうして築いたつながりはこれからもきっと続いていく。そう強く感じたキャンプだった。日本に帰ってきて、サンドニシオ村で過ごした日々を思い出すと涙が出る。きっと村人も同じ気持ちのはず。サンドニシオ村でワークキャンプができてよかった。村人に出逢えてよかった。これからずっと、一生、私たちはこのかけがえのないつながりを大事にしていく。そしてまたいつか、「ただいま」と言ってサンドニシオ村に帰ろう。

2013 年サンドニシオキャンプ　リーダー　岩邊かんな

2.FIWC とは

Friends
International
Work
Camp



FIWC は九州（主に福岡）の大学生が主体となり学生のみで国内外で国際協力を行っている学生 NGO 団体です。

【国際活動】

- 中国キャンプ
  ハンセン病快復村へ行き、村人のケアやインフラ整備を中国の大学生と行う。
- フィリピンキャンプ
  フィリピンレイテ島の貧困村を訪れインフラ整備を村人と共に行いながら交流を図る。

【国内活動】

- 耶馬溪キャンプ　　→年 3 回大分県の耶馬溪で農業体験を行っている。
- FP（FIWC Party）　→月1回第4土曜日に「びおとーぷ」で行っているワークショップ形式の勉強会。

他にも自由な発想で自由な活動を行っている柔軟さがFIWC九州の特徴です。また、FIWC は九州の他、関東、関西、東海、広島に支部があり、互いに情報交換を行いながらそれぞれが自立した活動を行っています。

☆キャンプメンバーだけでなく国内活動にも一緒に参加してくれる大学生を募集中！！

3.重要人物

現地エンジニア：ロクロクさん

1999 年から FIWC 関東のキャンプに参加してくださっている現地のエンジニア。FIWC 九州発足後は九州のプロジェクトのみに関わらずキャンプを様々な面から支えてくださっています。今回は体調もほとんど回復しており、今まで通りのサポートをしてくださいました。FIWC のメンバーを心から愛してくれている、お父さん的な存在です。

ダディ・ドドン

2009 年のワーク時にお世話になり、それ以降も私たちの活動に協力してくださっている元マタグオブ副市長。下見キャンプ中にはエンジニアとして協力して頂き、下見キャンプ終了後も資材の手配などをしてくださいました。今回のキャンプでは仕事（農業）が忙しく、会ったのは２回程でしたが、キャンプ成功に大きく貢献してくださいました。

サンドニシオ村の村長：アルセニオ

今回のキャンプ地、サンドニシオ村のカピタン（村長）。常に FIWC メンバーを気遣ってくれる、真面目で優しいおじさんです。今回わかったことは、寝るのが早い！（笑）英語が苦手だけど、そこは笑顔でカバーします。

マサバ村の村長：ピロ

前回のキャンプ地、マサバ村のカピタン（村長）。今回は半日だけマサバ村を訪問し、村人と再会を喜び合いました。また、今回役員を引き連れてワークのお手伝いに来てくれました！FIWC 九州のことを理解してくれており、ジョークの上手な頼もしいおじさんです。

NorWeLeDePAI(North Westerm Leyte Development Parent's Association Inc.)

FIWC 九州と 2004 年から連携体制をとっている現地の NGO 団体。FIWC 関東とも協力しており、フィリピンでワークキャンプをする私達にとっては重要な存在です。この団体は、レイテ島北西部の村々で子供たちの両親が中心となってコミュニティの発展を目指す活動を行っており、世界的な NGO である World Vision のドイツ支部から資金援助を受けています。今回はパスポート・貴重品の管理などをしていただきました。

4.ワーク地・訪問地紹介

サンドニシオ（SAN DIONESIO）村

今回のワーク地。人口 400 人程度の小さな村。前回のワーク地マサバ村の隣に位置する。マタグオブの中心地からバイクで 20 分ほどかかり、ワーク場所以外は比較的通りやすい道が続いている。山奥であるため村では電波が入る場所がほとんどない。主な産業は農業・ココナッツ・アバカ（マニラ麻）だ。マタグオブ市の中でも特に貧しい村であったが、精一杯のもてなしをしてくれ、日本人は常にお腹がいっぱいだった。

マサバ（MASABA）村

前回のワーク地。サンドニシオ村からトラックで 30 分程、徒歩 1 時間半ほどかかる。村の公道が荒れており、前回のキャンプではこの道の舗装を行なった。今回は隣村ということで、村の役員や子供たちがワークの手伝いに来てくれた。

マタグオブ（Matag-of）市

サンドニシオ・マサバ村が所属する町。フィリピン南東の島、レイテ島の西側に位置する田舎町。オルモックからバスで 1 時間半ほど離れている。中心にはマーケットなど様々な店が立ち並んでいる。その一方で山間部に位置する村は水道や生活環境が整っていないことが多く、周辺の町と比べても最も貧しい町の 1 つである。FIWC 九州は過去 6 年間この町でプロジェクトを行なっている。今では私たちの活動が浸透しつつあり、日本人への理解が深まっている。今回のプロジェクトは、市・村・FIWC の共同でのプロジェクトという形であった。

オルモック（ORMOC）

レイテ島西部で最も栄えている港町。街中には大きなスーパーマーケット、大きな病院、銀行、郵便局など、必要なものはすべて揃っている。フェリー乗り場や大きなバスターミナルもある。オルモックからレイテ島の各町へバスが出ている。

セブ（CEBU）

フィリピン中部のビサヤ諸島にあるセブ島。マニラ首都圏に次ぐ大都市圏。キャンプでは隣のマクタン島にあるマクタン・セブ国際空港から出入国し、空港施設内にあるシランガンホテルに宿泊。またマンダウエにあるイミグレーションでビザを取得、最終日にはセブ港近くの SM という大きなデパートで買い物を楽しんだ。

5.活動日程

●MTGスケジュール

12月3日	第1回MTG@びおとーぷ	2月16日～17日	国内合宿
12月13日	第2回MTG@あすみん	2月21日	先発隊出発
12月20日	第3回MTG@あすみん	3月1日	本隊出発
1月7日	第4回MTG@びおとーぷ	3月21日	帰国
1月17日	第5回MTG@びおとーぷ	3月25日	帰国後MTG@びおとーぷ
2月16日	第6回MTG@那珂川別荘	4月27日	報告会@びおとーぷ

●キャンプ活動スケジュール

月	火	水	木	金	土	日
			2/21	22	23	1月24日
			先発隊出発	VISA取得 村到着	GAM宣伝	GAM(1)
25	26	27	28	3/1	2	3
市長表敬(2)	ワーク①	ワーク②	ワーク③	本隊出発 ワーク④	本隊到着 Welcome Party	
4	5	6	7	8	9	10
ワーク⑤	ワーク⑥		ワーク⑦	Home Stay MTG(3) ワーク⑧ (草刈り)	Japanese Festival	Home Stay 開始
11	12	13	14	15	16	17
ワーク⑨	ワーク⑩		モニュメント作り	マサバ訪問(4)		Beach Party
18	19	20	21			
	Farewell Party	村出発	帰国			

（１） GAM(General Assembly Meeting)…通称ジェネアセ。村人に私たちの活動について知ってもらい、承諾を得る場。

（２） 市長表敬…Matag-ob の市役所を訪問し、市長さんに挨拶したり警察署にパスポートのコピーを渡したりする。

（３）Home Stay MTG…ホームステイ先に決まった家族への説明会。

（４）マサバ…前回のキャンプ地。８名が訪問した。

6.ワーク報告

- **概要**

場所：フィリピン共和国レイテ島マタグオブ市サンドニシオ村
内容：River Road Concreting（川の中の道のコンクリート舗装）
期間：2 月 26 日～3 月 12 日（土日を除く）、3 月 14 日
参加者：FIWC 九州、村人(15 人程度)、現地エンジニア

- **ワーク詳細**

(1)ワーク地詳細

村	サンドニシオ	人口	396 人
問題点	村から市の中心地へ行くときに通る川に問題がある。その川には橋が無いため、車やバイクは川の中を通ることになる。川の中は凸凹が激しく、そのすぐ横は滝になっているため、雨天時などは非常に危険である。また水に浸かるため、服が濡れたりバイクが壊れたりすることもある。歩行用の橋はあるのだが、現在手すりが壊れており通行には危険が伴う。		
場所と交通手段	移動手段は主に車、バイク、徒歩。バスは通っていない。マーケットからバイクで 20 分程度。		
備考	村が小さく貧しいため、橋を作るための予算を用意できない。		

(2)ワーク概要

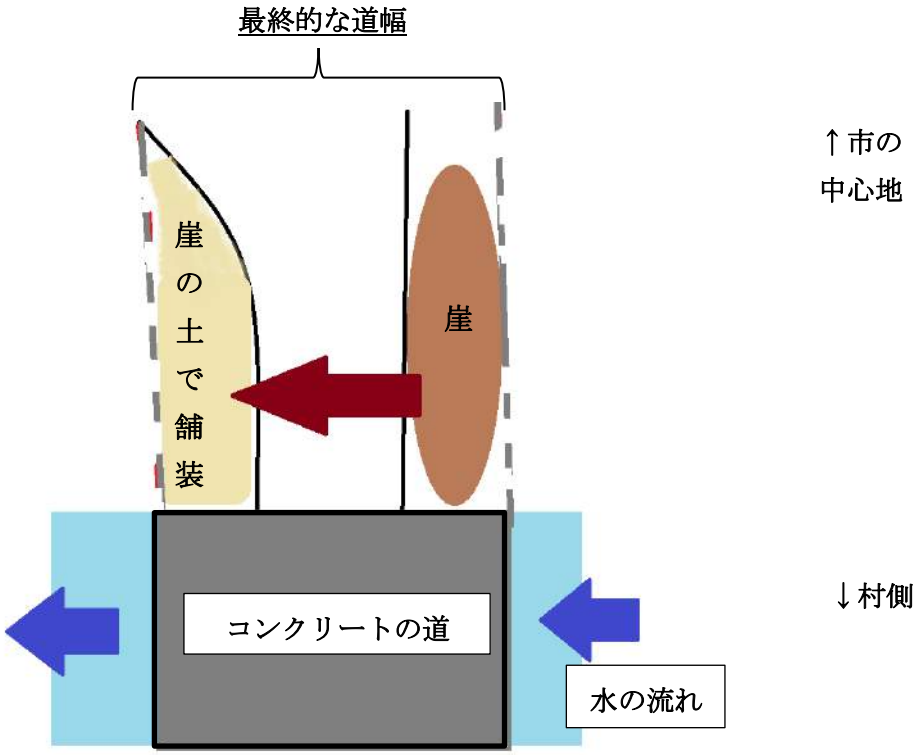
今回のワークでは川にコンクリートを敷いて車やバイクが通りやすい道を作る。全長約 15m、幅約 4m。道の下に幅約 1m の水の通る穴を作り、水は流量の多いときだけ道の上を通るようにする。水の通る穴を作らない案もあったが、道がずっと水に浸ったままであると滑りやすくなり、危険であるということからこの案はなくなった。

また、もともとの道幅が狭かったため、崖の斜面を削るなどして幅を広げ、そこから取れた土を使って荒れた部分を舗装した。道幅を広げたため、大きなトラックなどでも通れるようになった。(図参照)

水の通る穴

斜面を削る

【上から見た図】



◎一日のスケジュール

8：00～11：00	ワーク午前の部
11：00～13：30	昼食＆休憩
13：30～16：00	ワーク午後の部

ワークの進行具合やワーク環境（気温が高いなど）に合わせて開始や終了時刻を前後させた。またワーク中にも休憩は取り、体調管理に努めた。

◎ワークの手順

Ⅰ木材で橋の形を作る。

木材を使い、道の原型を作る。この作業は村の大工が行った。溝の側面にはベニヤ板を使う。木材はコンクリートが固まった後に取り外す。

Ⅱ土嚢で川の流れを変える。

セメントが流れないように枠の回りを土嚢で塞ぎ、枠の中の水が外に出ない状態を作る。

Ⅲ川底から 10cm 程度のところまでコンクリートを敷く。

木枠からコンクリートが流れ出ないよう注意しながら敷いていく。

●コンクリートを作る際の資材比率

セメント	砂	小石
1	3	3

Ⅳバールを敷いてワイヤーで固定する。

太さ 10mm のバールを等間隔に敷く。水の通る穴の部分はベニヤ板でふたをし、強度を上げるために太めのバールとパイプを敷く。その後ワイヤーで固定する。

Ⅴコンクリートを敷く。

表面を平らにするためにこの作業は一日で終える。
表面は村の大工が木材を使ってならす。

●このときのコンクリート資材比率

セメント	砂	小石
1	2	3

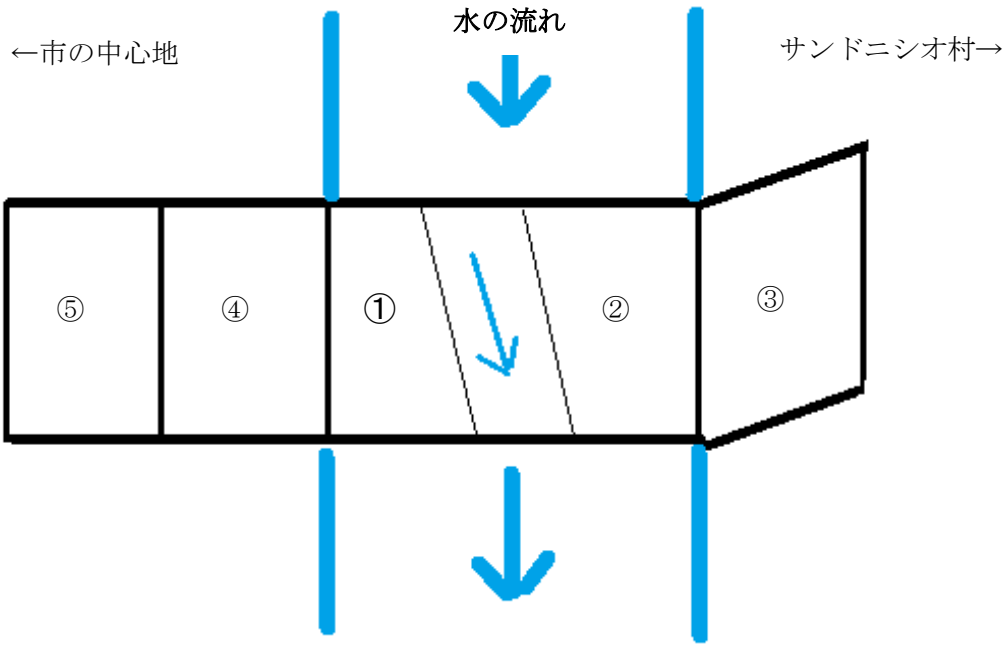
Ⅵ滑り止めを描く。

バイクや車が滑らないように模様を刻んで完成！

※Ⅱ、Ⅲの作業は図の①、②のときのみ

道を上から見た図

※①～⑤の順でコンクリート化

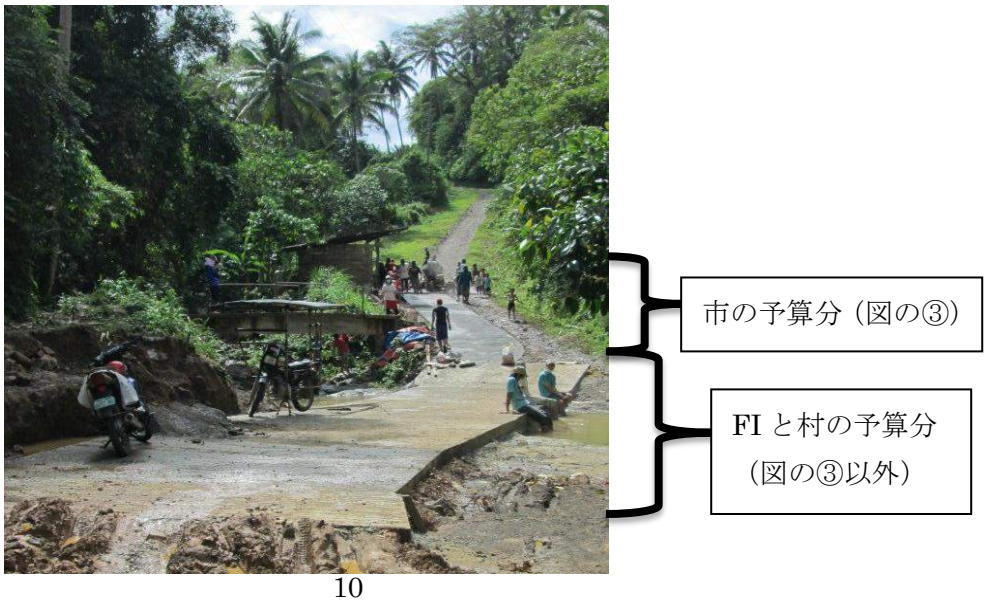


◎市の予算によるワーク

FI と村の予算分でのワーク（図の①②④⑤の部分）終了後、村側に約 25m、市の予算でコンクリート舗装を行った。（図の③の部分）これは市によるプロジェクトであるが、FI のワークが早く終わったため、こちらの作業も手伝わせてもらった。

このワーク期間は市から働き手に給料が支給されていた。FI はワークを手伝うことで給料をもらうのではなく、そのお金を市からの援助金としてビーチパーティーの予算に回してもらった。

（全体完成図）



◎草刈りワーク

今回、道づくりのワークが予定より早く終わったため、村の青年たちとの交流を目的とした草刈りワークを行った。FIWC として初めてのプロジェクトだったが今まで話したことのなかった村人と話せたりと、より仲を深める良い機会になった。以下詳細。

内容：草刈り
範囲：ワーク地から村までの道
日程：　8：00　ワーク開始
　　10：30　ワーク終了
　　11：00　スナックタイム

ワークの様子

◎モニュメント作り

ワークの記念として道の近くにモニュメントを作成した。モニュメントにはキャンパーとダディドドン、ロクロクさんの名前、キャンプテーマを刻んだ。また村の提案で道にも各メンバーの名前を刻んだ。これらを見て私たちと過ごした時間を思い出してほしいと思う。

道に刻んだ文字

キャンパー等の名前

● ワーク費の詳細

今回はレートが低く、予定よりもワーク費が少なくなってしまった。しかしできるだけ安く資材を手に入れるために、到着前からロクロクさんが調査をしてくれていたため、予定通り資材を買い揃えることができた。調査の結果、小石、砂、木材以外はすべてパロンポンで買うことになった。小石、砂、木材はダディドドンが手配してくれた。

FIWC 予算

資材・ツール費	P98,123
感謝料	P11,000
米代	P10,500
総計	**P119,623**

村予算

資材費	P29,000
給料	P11,000
その他	P95,000
総計	**P135,000**

【予算の詳細】

★感謝料

ロクロクさんとダディドドンに今回の協力に対して感謝料を支払った。分配の量は二人で話し合って決めるとのこと。

★米代

サンドニシオ村は、マタグオブ市の中でもとりわけ貧しい村である。村人が FI のワークに参加するには仕事を休まなければならないため、金銭的な問題から、村人がワークに参加できないのでは、または参加できたとしてもそのことが村人の生活を圧迫してしまうのでは、という二つの懸念があった。しかし FI は資金援助をする団体ではないため、給料を渡すことはできない。そこで話し合った結果、私たちは働きに来てくれた村人たちに、現金ではなく、米を支給することにした。基本的には 1 日につき 1kg を毎日ワーク後に村人に渡したが、ワークがハードだった日は 1.5kg、ワーク終了後も残って働いてくれた人には 2kg と、多めに渡すこともあった。量としては、1kg × 20 人 × 14 日　を目安として、計 7 サック（1 サック=40kg）を、初めにまとめて購入した。1 日に働きに来る人の数は村側が調節してくれていたため、毎日 20 人程度であったが、ワークがスムーズに進んだため、ワーク日数は当初の予想より少なくなった。結果として、4 サック弱の米が余った。余った米のうち、1 サックは日本人みんなのごはんを毎日作ってくれた 2 人のナナイにお礼として渡した。また 1 サックは 8 等分して各ホームステイ先に、残りはビーチ・フェアウェルパーティーで使用した。ホームステイに関しては村側も米 1 サックを用意していたため、結果として計 2 サックを各家庭に分配したことになった。

★村が出す給料について

当初の予定では村側も給料として米を渡す予定だった。しかし村人から米ではなくお金がいいとの声があった。そこでもともと米代として用意していたお金を給料として村人に渡していた。（毎週土曜日に１人 100 ペソ）

先にも述べたが FI は資金援助を目的としないこと、またこのお金が村のお金であることや、働き手のシフトを村が管理していたことを考慮し、給料については村側に任せていた。

★その他

もともとワーク中のスナックやバヤニハンの昼食代としての予算だった。しかし、バンクハウス(資材を置いておく小屋)や FIWC のために作ったトイレの費用、パーティでの予算など、ワーク以外の費用が加わったため予定よりも多くなってしまった。

● 総括

今回のワークは天候に恵まれ、資材もロクロクさんとダディドドンの協力で問題なくそろい、スムーズに進めることができた。また、もともと市からコンクリートミキサーを借りる予定だったがそれを必要としないほど村人が積極的であったため、ワークが始まって１週間で全体の６割を終えることができた。

道ができてからはサンドニシオのバイクだけでなく、さらに奥地にあるマサバ村のバイクなども快適に通っている姿が見られた。あるドライバーは、「道が出来てとても通りやすくなった。本当にありがとう。」と何度も言ってくれた。その言葉一つで今回のワークは成功したのではないかと思う。FIWC のワークは終わったが、国の予算がサンドニシオ村に降りることが決定し、これからさらにコンクリートの道は長くなる。このキャンプでできた道がどこまでも広がり大事にされたらいいなと心から思う。

7.生活状況

●衣

フィリピンは常夏の国であるが、雨季と乾季の２つの季節が存在する。最高気温が 30℃を超える日がほとんどのため、普段は T シャツ、半ズボン、サンダルといった、かなりラフな服装であった。ただし、朝晩に冷え込むこともあるので長袖などの羽織る衣服が必要。

熱中症対策のため帽子は必須。また、日焼け防止のためにアームカバーやスポーツ用のアンダーウェアを着たり、半ズボンの下にレギンスを履いたりしているキャンパーも多かった。たいていの衣類は現地にて安価で購入可能である。

●食

フィリピン料理は鶏肉、豚肉、野菜、魚を醤油や味の素などで味付けしたものが中心で、日本人の味覚に合うものが多い。主食は米で、自分の皿に料理を取り分けてスプーンとフォークを使って食べるのが一般的。お祝い事があるとヤギの肉や豚の丸焼きが出る。朝食時にコーヒーを飲むのが一般的らしく、その他の飲み物としては水やコーラ、スプライトなどがあった。日本人は生水を飲むとお腹を壊す可能性があるため、必ずミネラルウォーターを飲むようにしていた。また、バナナやココナッツ、マンゴーの他に、日本では食べられないような南国ならではのフルーツも数多くあった。

●住

キャンプ前半は､バランガイホール(村の公民館)を借りて、日本人全員で共同生活を送った。ミーティングもここで行い､寝るときはゴザを敷いた。体調不良者は、向かいにあるヘルスセンター(村の保健室)で寝泊りをした。キャンプ後半は２人１組でホームステイを行い､食事も各自の家で行った。

【ディスコ】

お酒とダンスが大好きなフィリピン人にとって欠かせないのがディスコ。何かイベントがある日の夜は、必ずと言っていいほど行われる。日本のようにクラブハウスで行うわけではなく、バランガイホールの前にあるバスケットコートにサウンドシステムを設置するというシンプルなもの。この時にしばしばお酒も振舞われる。今回のキャンプでは GAM、Welcome Party、Japanese Festival、Farewell Party の日の夜に行われた。小さな子どもからお年寄りまで、たくさんの人と一緒に音楽に合わせて楽しい時を過ごした。

【風呂・トイレ】

現地では水浴びのことを「リーゴ」と言うが、これが日本でいう風呂にあたる。湯船やお湯が無いため、ポリバケツやタンクに溜めた水を手桶ですくって水浴びをする。家によってはトイレとリーゴの場所が同じであったり、屋外でリーゴをしたりすることもある。体温を奪われて風邪を引くことがあるため、夜やワーク終了後 1 時間はリーゴを避け、日が暮れるまでには済ませていた。

トイレは便座がなく、低くて小さい洋式便所が主流。用を足した後はポリバケツに溜めた水を手桶ですくって流す。たまに上手く流れないことがあるから要注意！紙を流せないため、ゴミ袋を持っていき、ゴミとして捨てた。

【洗濯】

洗濯機がないため全て手洗い。たらいに水を溜めて粉末洗剤で汚れを落とす。日本人は手洗いに慣れていないため、時間がかかる上に汚れがあまり落ちない…。共同生活中は当番制で洗濯を行うが、ホームステイが始まると各自で行うようにした。洗濯に必要なものは全て現地で購入可能。

【買い物】

サンドニシオ村の中にはサリサリと呼ばれる小さな個人商店があり、お菓子や飲み物などちょっとした買い物をすることができた。また、村から「ハバルハバル」と呼ばれるバイクタクシーで 20 分ほどの所に、マタグオブ市のマーケットがあり、そこでは食料品や衣類など、生活に必要なものを手に入れることができた。更にマーケットから車で 1 時間ほどの所にあるオルモックという港町には、大きなスーパーや換金所があり、マタグオブではできない買い物や、円からペソへの換金などができた。

【交通】

サンドニシオ村にはバスが通っておらず、移動手段は村に 1 台ある「モルティカブ」と呼ばれる軽トラックか、中型バイクの後ろに客を乗せて走る「ハバルハバル」のどちらかのみであった。オルモックのように離れた場所に行くには、マーケットもしくはサントロサリオ村からバスやバンに乗って移動した。その他、空港 - セブ港間はバン又はタクシー、セブ島 - レイテ島間はフェリーで行き来した。フィリピンにはサイドカー付きバイクの「トライシクル」や、アメリカのジープを改造したバス「ジープニー」など、個性的な交通機関が発達しているが、バンやタクシーでは高額な運賃をふっかけてくるドライバーもいるようなので、値段交渉はしっかりと行い、乗る前に必ず料金を確かめること。また、降りるときは忘れ物がないかどうかをきちんと確認し、もしもの場合に連絡を取るため、できるだけタクシーのナンバーを控えておくべきである。

8.各係報告

(1) KP (kichen Police)

仕事内容：主にキャンパーの生活の管理をする係

国内での仕事

・共同生活の食器洗い、洗濯のシフトの作成
・Ferewell Party で紹介する日本食のレシピ準備
　材料買い出し

〇シフトについて
洗濯４人、食器洗い２人でシフトを作成。その際イベントやワークなどの日程に合わせてできる限りキャンパー全員が平等になるように工夫した。

＜反省＞
・先発と本隊の回数をほぼ同じにしたため、本隊の負担が大きくなってしまった。
→先発の方が本隊よりも滞在期間が長いため、回数を増やすべきだった。

現地での仕事

・ミネラルウォーターの管理
・生活用品の管理
・トイレの水の管理
・Ferewell Party の食材リスト、シフト作成、説明

１）ミネラルウォーターの管理について
　フィリピンでは日本と違い、日本人が水道水を飲むとお腹を下す危険性が高いため、ミネラルウォーターを飲む。そのミネラルウォーターを常にきらさないように管理する。今回は４本のタンクを購入し、タンクが空になったらその都度、買い出し日に補充していた。また、ワーク時の水分補給用のミネラルウォーターもＫＰが準備し、午前と午後のワーク前にペットボトルに水を補給しておいた。

＜反省＞
◎　ワーク前の水の補充は、時間がない時は手が空いているキャンパーが協力していたので集合時間に間に合った。

2）生活用品の管理について

食器用石けん、たらい、スポンジ、洗濯用洗剤、トイレ用ブラシはオルモックのマーケットで購入、ハンガー、手桶二つは前回のものをくりこした。
ホームステイ前に各家庭に洗剤とハンガーを分配した。

＜反省＞
×途中でたらいを紛失、手桶が一つ壊れた。
→KP が毎日確認し、使用後はバランガイホールの中へ返却するように呼びかけを徹底するべきだった。
×ハンガーの本数の確認ができていない。
→最終日に本数の確認をするべきだった。

3）トイレの水の管理について

現地のトイレはポリバケツに水をためて、手桶を使って流すため常に水が必要。水がなくならないように、一日に何度か確認して水が少ない場合は補充した。
＜反省（良かった点）＞
・キャンパーや村の子供たちが協力してくれたため、水が完全になくなることはなかった。

4）Ferewell Party の日本食について

今回、Farewell Party のためにそばめしを作った。材料は前日までにリストを作り、どこの家のキッチンや食器を使ってよいか確認した。　当日は４，５人ずつ 30 分交代のシフト制にした。
＜反省＞
×調理時間を考えていなかったため、時間配分が上手くできておらず時間がかかってしまった。
→包丁、まな板の数を増やすべきだった。
◎当日は学校の卒業式やオルモックへの買い出しと重なり、人手不足だったが、シフトに関係なくキャンパー達が手伝ってくれてよかった。

(2) イベント

①Welcome Party（3/2(土)@BRGY ホール）

本隊がサンドニシオ村に到着した当日に、村人が歓迎の意味を込めて Welcome Party を開いてくれた。FI がそれぞれ自己紹介をしたあと、日本で購入してきたはっぴを着てソーラン節を披露した。その後音楽に合わせて村人と遅くまで踊った。

＜反省＞

×ソーラン節のダンスリーダーが練習不足だった。

×使用したはっぴを村人全員分はないのにその場で村人にあげてしまった。→もらえなかった村人が不満を持ってしまった。

②Japanese Festival (3/9 日(土)@BRGY ホール)

【タイムスケジュール】

10:00~11:30 日本語教室

11:30~14:30 昼休み(スナックタイム)

14:30~15:30 習字、凧、紙粘土

15:30~17:00 ラジオ体操、大縄跳び

（全体の様子）

日本語教室、カルチャー(習字、凧、紙粘土)、スポーツ(ラジオ体操、大縄跳び)を行った。カルチャーは 3 グループに分かれて、それぞれのグループごとに進行した。日本語教室には 130 人ほどの村人が集まってくれた。午後から雨が降り始めたが 14 時頃にやんだため、予定より少し遅らせて 14:30 から午後の部を開始した。

日本語教室

簡単な日常で使う単語(おはよう、ありがとう等)をビサヤ語、日本語、ローマ字で書いている紙を 4 セット用意して、それを見せながら村人に日本語を教えた。村人は配布した鉛筆と紙を使ってノートをとりながら熱心に勉強してくれた。日本語教室を行った後、村人が教えた日本語をよく使ってくれた。村人に配った鉛筆と紙は日本の子どもたちからだということをビサヤ語で説明し、村人に持ち帰ってもらった。

＜反省＞

◎子どもと大人で進めるスピードの差はあったが日本人それぞれの働きでうまく進行することができた。

日本文化（習字・凧・紙粘土）

《習字》

【使用したもの】

- 筆　　20 本
- 半紙　　300 枚
- 墨汁　　5 本
- プリンカップ　20 個
- 新聞紙

＜反省＞

×半紙を乾かすための新聞紙が足りなかった。

×余った半紙を後で村人に配ろうと思っていたが村を出る時まで忘れていた。

◎書くときに名前も書いてもらったため乾かした後本人にプレゼントすることができた。

《凧》

【使用したもの】
・ビニール袋　40 袋
・セロハンテープ
・ストロー
・つまようじ
・ミシン糸
・たこ糸
・マジック
・はさみ

＜反省＞
◎安全面に気を使って子供たちが楽しむことができた。
×たこが壊れやすかった。
×事前にいつくか完成したものを用意しておいたのはよかったがもっとたくさん作るべきだった。
×役割分担をきちんとしておくべきだった。

《紙粘土》

【使用したもの】
・紙粘土　　16 個
・絵具　　3 セット
・筆　　15 本
・新聞紙

＜反省＞
×紙粘土作りに時間がかかり、凧・習字を体験する時間が無かった。
×紙粘土の分配がうまくいかず、いくつも作品を作る子がいたり、あまり作れない子がいたりした。
×後日に色塗りをしたために、来ていない子がたくさんいて本人に渡せない作品もあった。
×移動させる際に壊してしまうなど、保存の仕方が悪かった。

大縄跳び

準備運動としてラジオ体操を行った。村人も楽しんでくれて、「もう一度!」という声があがり 2 回行った。大縄跳びは日本人と村人の混合チームを 9 チームほど作った。2 回の合計をチームの記録とし合計が最も多かったチームに景品として手づくりのミサンガをプレゼントした。みんなで回数をカウントしたり応援したりと跳ぶ側も観客側も楽しんでくれ、非常に盛り上がった。村人の希望により 2 回戦も行った。

＜反省＞

◎ラジオ体操は音楽を流して行い、みんなで楽しめて非常に良かった。

◎大縄跳びでは予想以上に村人が集まってくれ予定より多くのチームを作ることができみんなで楽しむことができた。

<Japanese Festival 全体の反省>

×昼休みに雨が降り、午後の部を始める頃にはやんだものの地面が濡れていて使える場所が狭かったので、雨天時に使える場所をもう少し調べておけばよかった。

×Japanese Festival の宣伝ポスターを作ったときに、こどもたちにも手伝ってもらっていたが、子どもたちが油性ペンを持ち出していろいろなところに落書きをしたためもう少しペンの管理をしっかりするべきだった。

◎全体的に準備がよくできていたのでスムーズに進んで良かった。

③Beach Party(3/17(日)@ビラバ市　レインビーチ)

(全体の様子)　ワークの打ち上げとしてビラバ市のレインビーチでビーチパーティーを行った。泳いだり、バーベキューをしたりお酒を飲んだりと大人から子どもまで非常に盛り上がった。

④Farewell Party(3/19(火)@BRGY ホール)

（全体の様子）

キャンプの最終日にお別れの意味を込めて村人が Farewell Party を開いてくれた。豚の丸焼きなどのご馳走が用意され、村人には日本食としてそばめしを振る舞った。食事を終えたあと、一人ずつステージに上がりスピーチをした。日本人でスピッツの「チェリー」を歌った際には、村人も一緒になって歌ってくれた。その後は踊ったりおしゃべりをしたりと朝まで村人と一緒に楽しい時間を過ごし、別れを惜しんだ。

⑤シークレットイベント（for　Japanese）

今回 BRGY ホールの広さの関係上、男女別々のところで寝ていた。それにより日本人全員で話をする機会がほとんど無かったため、「日本人だけでおしゃべりをしよう!」というイベントをメンバーに秘密で企画した。イベント係がお菓子とお酒を事前に用意しておき、MTG 後に輪になってメンバー皆でいろいろなことを語り合った。このイベントによって日本人同士の仲をさらに深めることができたと思う。

(3) 会計

【仕事内容】

・金銭の徴収・管理・換金

・毎日の収支記帳

【料金の目安】

◎ 宿泊費

シランガンホテル(セブ島)※エアコン付き

ダブルベッド　975P／部屋、泊

◎ 交通費

・バス

セブ島→イミグレーション→港　250P／人

オルモック→マタグオブ　50P／人

SM→空港　80P／人

・船(スーパーキャット)

セブ島→オルモック　750P／人

・トラック

オルモック→サンドニシオ　1300P／台

・モルティカブ

オルモック→サンドニシオ　850P／台

サンドニシオ→カナンガン　150P／台

・ハバルハバル

サンドニシオ→サントロサリオ　30P／人

マタグオブ→サンドニシオ　30P／人

サンドニシオ→カンソソ　30P／人

・バン

サントロサリオ→オルモック　50P／人

オルモック→マタグオブ　50P／人

・その他

空港税　550P／人

ガソリン(モルティカブ)　500P／回

※レート

10000 円(オルモック)

→4045P(2013.2.22)

→4200P(2013.3.4)

【おおよその旅費】

旅費	先発	後発
航空券	64585	64605
保険料	5000	4000
生活費	10000	10000
個人費	15000	10000
キャンプ参加費	1000	1000
ワーク費	3125	3125
ビザ代	6060	0
合計	104770	92730
		単位：円

【滞在中の収支】

収入			支出(生活費)		
徴収金	生活費	73020		内訳	費用
	繰越金	12125	宿泊費	シランガン	3900
	ワーク費	121800	食費	水	1935
	寄付金から	1120		食費	11429
	合計	208065	携帯	ロード	1800
支出(ワーク費)			交通費	船	26900
ワーク費	資材	97129		バン	1490
	その他※	11600		ハバル	2560
感謝料	ロクロクさん	13000		バス	2600
	合計	121729		トライシクル	550
全体の収支 208065－121729－83850＝2486P ※ワーク費その他 お米やデリバリー 単位：ペソ				モルティカブ	1650
				トラック	3300
				タクシー	1550
				その他	1100
			Tシャツ	服	1805
				印刷	3250
			生活費	雑貨	3023
			パーティ	ビーチ	4388
				フェアウェル	10140
				そば飯	480
				合計	83850

〈反省〉

〇良かった点

・みんながしっかりメモをとってくれたおかげで、大きな誤差はでなかった。

・メンバー全員が買い物上手で安くたくさん食料を手に入れることができたし、小銭も一度もなくならかったので会計としてやりやすかった。

〇悪かった点

・片方に任せっきりにしていた。

・時間がない、しんどいなどの理由で記帳を溜めていたときがあった。

→お互いに話し合って計画的に分担してする。

(4) 保健・安全

[仕事内容]
保健バッグの携帯、管理・メンバーへの声掛け
ワーク時の水分管理
[保健バッグの中身]
ムヒ・マキロン・カットバン・体温計・・爪切り・ガーゼ・はさみ・包帯・マスク・ピンセット・湿布・冷えピタ・下痢止め・解熱剤・胃薬・風邪薬・レスキューシート
※これ以外に、青年海外協力隊の方から頂いた現地の薬がある。万が一症状がひどくなり、日本から持参した薬が効かなかった場合はこれを服用する。

[キャンプ中に使用したもの、その事例]
ムヒ　・・虫刺され
爪切り
カットバン・・すり傷
マキロン・・すり傷、虫刺されの消毒
湿布・・打撲
冷えピタ・・日焼け

[推奨される予防接種]　※ただし接種は任意
・A,B 型肺炎・破傷風・日本脳炎・狂犬病
⇒詳細は厚生労働省などの HP を参照

[衛星電話の使用]
今回電波の入らない村での滞在ということで、日本デジコム（株）さんから衛星電話をレンタルした。普段は現地の携帯を使い、緊急時用として持っていた。

[反省]
○ワーク中の水分と塩分の補給はこまめに取ることが出来た。
○保健係だけでなくみんなが目を配らせてくれて介抱することが出来た。
×軽い熱中症の人がでた。
　→熱中症の対処や対策を事前に調べておくべきだった。
×保健バッグの中身を整理することが出来なかった。
　→使ったらその都度元あった場所に戻す。

(5) ホームステイ

【主な仕事内容】

・ＧＡＭでホームステイについて話す。
・村長にホームステイの概要を話し、ホームステイをする家をあげてもらう。
・ホームステイする家を調査する。
・キャンパーの希望をとり、誰がどの家にホームステイするのかを決める。
・リーダーとホームステイ中の規則を決める（必要な場合は村長と相談）
・ホームステイミーティングを開き、ホストファミリーに注意事項について説明する。

【ペア決定までの流れ】

１．候補をあげてもらう

ステイ開始の１週間程前に村長にホームステイの概要を話し、ホームステイ可能な家をあげてもらう。今回はキャンパー16 人で８ペアだったため、8 軒あげてもらった。

２．ホームステイ先の家を調査

家族構成、英語が話せる人がいるか、トイレの有無、犬がいるか、男女共に受け入れ可能か、の５点を調査した。

３．希望調査

調査結果を表にしてキャンパーに説明し、第３希望までの家を紙に書いて提出してもらった。その際、個人的な希望(ペアの性別など)がある人も遠慮なく書いてもらった。

４．ペア決定

キャンパーの希望ができるだけ叶うように、ホームステイ係２人で様々なパターンを考えて決定する。

※今回は特に要望もなかったため、男女の組み合わせでのホームステイが７ペアと多めになったが、問題はなかった。

〈今回のホームステイペア〉

かんな ぐっさん	てぃもん みさき	なつき あきお	しぇい あやな
しほ ネイビー	なお あっこ	はらちゃん しゅんや	まーちゃん せいじゅ

【今回のスケジュール】

2/24　<u>ＧＡＭ</u>

・ホームステイについて説明

3/7　<u>ホームステイ開始４日前</u>

・ホームステイ調査

・キャンパーの希望調査

3/8　<u>ホームステイ開始２日前</u>

・ホームステイミーティング

・ホームステイ先決定

【反省】

○門限はあったが、就寝の妨げにならないように、帰宅時間を各家庭の生活リズムに合わせることができた。

○ホームステイ中であったが、夜は大人数で楽しむ時間もつくることができた。
逆にホームステイ先の家族だけで過ごす日もあり、バランスがとれていた。

×ホームステイミーティングの準備が不十分であった。

→英語・ビサヤ語が話せるロクロクさんにもいてもらうべき
早めにホームステイミーティングの日程を決めてロクロクさんにもホームステイ先の家庭にもアポをとる。また、ホームステイ先に伝えたいことをしっかり整理しておく。

×NorWeLeDePAI のホームステイに関する規約書を忘れた。
→過去の報告書等を見返し、国内での準備もしっかりする。
※本来ならば NorWeLeDePAI のホームステイに関する規約書を持っていき、ホームステイミーティングでホストファミリーにサインをもらうはずだったが持っていくのを忘れてしまった。これにはホームステイに関する注意事項などがビサヤ語で書いてある。

【総括】

ホームステイで現地の生活リズムに合わせた暮らしを送ることで、日本とは異なる新鮮な生活様式を体験するだけでなく、深く現地の文化を理解することができた。日本人がいることで、サンドニシオの人々の生活にも普段とは違う何らかの変化はあったであろうが、各家庭で家族との時間を大切にすることでサンドニシオの人々とより親しくなり、現地での生活を楽しむことができた。どの家庭も毎日笑顔で溢れる幸せな 10 日間となった(＾０＾)♡

9.T シャツ

～Tシャツづくりの流れ～

【日本ですること】

・キャンパーからデザインを募集、決定

・決定したデザインを A4 サイズの紙に印刷して現地へ持っていく。

【現地での流れ】

①オルモック到着初日、印刷屋へ行ってデザインを渡す。

・何日の何時にまた来るということ

・次来るときにプリント用のTシャツを持ってくること

・その日までにデザインをパソコンに取り込んでおくこと

この３つについて念を押しておく！

②後発を迎えに行く際にお迎え組が柄なしのTシャツを購入→印刷屋に持っていく。

そこでパソコンに取り込んだデザインを確認！

(①で念を押さないとここで困る)

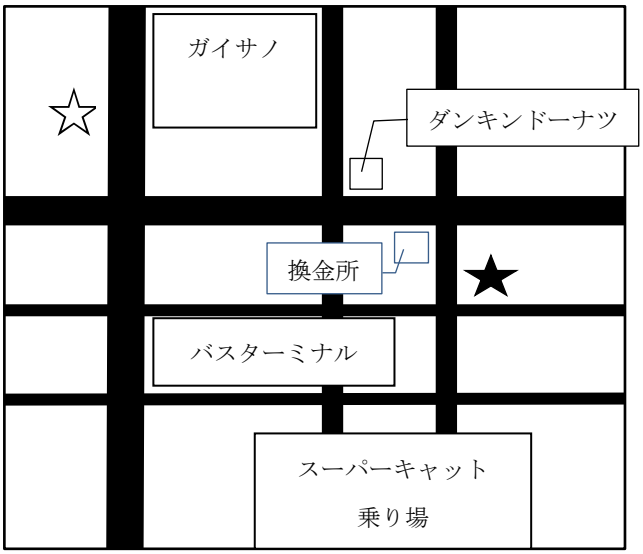
③完成したTシャツをオルモックまで取りに行く。

ジャパフェスの前に取りに行く！

【今回の費用】　・Tシャツ 19 枚　　計 1805 ペソ

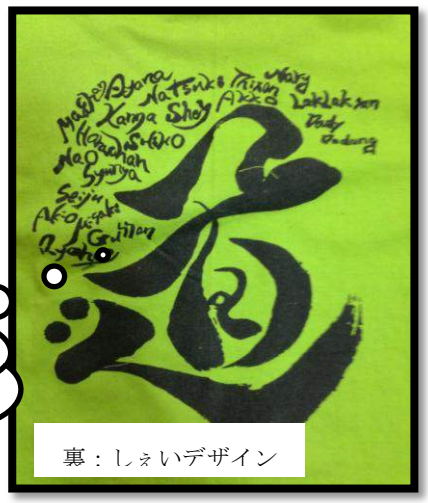
・印刷代　　前払い/受け取り時　各 1625 ペソ

【購入＆印刷場所】



※★は印刷屋、☆が T シャツ購入場所

表：志保デザイン



裏：しゃいデザイン

漢字は「道」とも
「つなぐ」とも読めるよ！

10.他己紹介

◇かんな◇

キャンプリーダーのかんな(^^)女のキャンパーで唯一available だったかんなの安定感と場をまとめる力は凄かった。現地の男性がそんなかんなの魅力に気づいたときにはもう時間がなかったね....(笑)けど、フリーでもかんななりに楽しんどったね。かんなにはこのキャンプ全て任せっきりで申し訳なかったけどリーダーのおかげで笑顔で始まり笑顔で終われたと思えます!!!!かんながリーダーでホント良かったと思えるキャンプになった。ありがとうかんな!!!!!そしてお疲れ様。

From しゅんや

◇しほ◇

ちょーとの思い出はね、まず最初は一緒にTシャツ作りに行ったよね♪あの時俺はちょーと仲良しのつもりで行ったのに、でもちょーはそうは思ってなかったって言われて正直ショックだったよ。あと、ちょーはこう見えてほんとに下ネタ大好き女子！！！もしかしたら、下ネタ話してるときが一番楽しかったんじゃない？でも、実はしっかり者で常に周りに気を配ってる姿はギャップで萌え～だったよ（笑）ちょーからはたくさんの笑いをいつでもどこでももらえたから感謝してます＼(^o^)／☆ありがとー♪そして、一か月間キャンプお疲れ様でした。　From あきお

◆しぇい◆

アツい男でありながら女子よりも女子力のある…我らがワークリーダーSHEY!!別名しぇいこ(♀)特技はソーラン節とミサンガ作りと習字。チャームポイントは八重歯と眉毛とぎゃらんどぅー!?まーと二人でワークを引っ張ってくれました!!ギターも上達、チェリーばっちりやったね☆諸事情により Love Police はクビになってたけど…。そんな彼は FI 九州の委員長。これからはキャンパーだけでなく FI 全体をぐいぐい引っ張ってってください(^0^)ワークリーダーおつかれさーん♪

From　はら

◊まーちゃん◊

　みんな大好き末っ子まぁーちゃん☆★☆
ベビーフェイスで愛らしいまぁーちゃんだけど今回のキャンプではワーク副リーダーとして、しぇいをサポートしつつ現地の人やキャンパーをしっかりまとめワーク成功へと導くとっても頼もしい存在でした！また、恋愛の方は誰よりも経験豊富でとにかく乙女でたくさんの事を学ばせてもらいました m(__)m 笑　パラホボック(酔っ払い)で挑んだモニュメント作りでのまぁーちゃんの末っ子らしいあの字をキャンパーは一生忘れないでしょう！笑　まぁーちゃんがいてくれて心からよかった(*^_^*)本当におつかれ様♪

From あっこ

◊あやな◊

　あやなはちっちゃい子からもおっきい子？からもみんなから好かれて人気者やった！実際のところ一番もててたんじゃ…。ふとした一言が現地人の心をこなごなに打ち砕いてしまったのも、それを周りが延々とからかい続けるのもみんながあやなを好きだったからだと思う(^_^;)だってめちゃくちゃ優しいもん!!!!って思ってたけど実は彼女は優しいふりをしているそうな。あと彼女、尋常じゃなく座り心地がいいです。機会があったら座らせてもらってください。「ほんとは焼き肉よりも寿司が好き☆」というお花が似合うかわいい天使、あやなでした～

From ネイビー

◊なつき◊

　なつきは驚くと目玉が飛び出そうなくらい目が大きいです。そしてフィリピンのちょっと濃いお化粧でも、とっても似合う美人さんです♡　そんな彼女から放たれる下ネタや人の心を痛めつけるツッコミは多くの人の笑いと涙を生んだと思います…笑　後は持ち前の運動神経で踊るダンスはかっこいい！　そんな彼女が射止めてきた青年は数知れず…　サンドニシオでお幸せに♪笑

From てぃもん

◇はらちゃん◇

はらちゃんは誰とでも仲良く笑ってて、夜は毎日のように酔って顔が真っ赤やったね。時には乙女になる場面もあってなんか新鮮やった^^個人的には誰よりもキャンプを楽しんでた気がする。いっつもかんなに言動を批判されてたけど、実はしっかりしててみんなに愛されてたね。はらちゃん見てるとなんか安心できたぞ。ほんと一緒キャンプ行けてよかった。ありがとうハラマイヤー！やばい…いいこと書き過ぎた（笑）

From ぐっさん

◇なお◇

なおは元気いっぱいで明るい女の子。村の青年達にまじってバスケットをしたり、おじさん達と楽しそうに会話したり！お昼休みになると筋トレやラクロスの自主練をしたりと、アスリートな一面も見せ、他のメンバーから「将来、ママさんバレーしてそう(笑)」と言われることも…。また、キャンプ二回目ということで細かいことに気づいたりと、頼りになることが多かった。とにかく、一緒にいて楽しい女の子です。

From せいじゅ

♦あきお♦

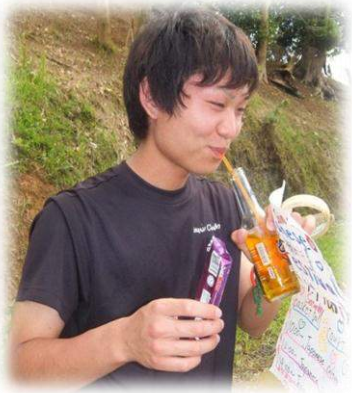
サンドニシオのスターとはこの男！村人には「パリアキオ！」「アキオタクサンキモイネ！」で親しまれる喜界島出身あきお！本名は東郷瑛（とうごうあきら）というイケメンネーム。あきおのコミュ力にはみんなびっくりでした！英語はもちろん日本語も上手く話せないのになぜかビサヤ語は話せます。ビサヤ語の歌も歌います。彼が言葉を発すると村人は大爆笑！あきおの名前はきっとサンドニシオに受け継がれるでしょう。みんなを盛り上げてくれて本当にありがとう(^0^)何気に保健係の仕事もしっかりこなしてたね！来年のフィリキャンも期待してるよー！

From なお

♦てぃもん♦

「ティモン シジミ！」貝のようなつぶらな瞳とハイテンションが魅力の大塚康平。またの名をアルドリン。朝からフィリピン人顔負けのテンションの高さで日本人を驚かせていました(*_*)空回りもするけど、いつも場を盛り上げてくれるナイスキャラなてぃもんです♡ただのお調子者に見せかけて、ほんとは気配りも絶やさない良いやつ！てぃもんのおかげで毎日楽しかったよ～ありがとー＼(^o^)／

From しほ



♦せいじゅ♦

「ゆったり」という言葉はきっと彼のためにあります。子供たちに「せじゅ!」と呼ばれると「おうー」と返事をします。ブラックコーヒーが飲めるようになりました。でも本当は甘党です(^q^) とっても働き者で、ワークのときに少しも表情を変えずにサックを運ぶ姿はまさに現地人! そんな優しさとたくましさを兼ね備えた、愛されキャラのせーちゃんのことが、みーーーんな（お姉さま方は特に♡）大好きなのでした＼(^o^)／

From まーちゃん

◇みさき◇

自称ピュアホワイト！キャッチフレーズは「みーたんとは呼ばないで♡」色白で本隊到着前からすでにモテモテやったね。実はギターも弾けちゃいます！可愛らしい顔にトゲのある言葉が特徴です。その毒舌でキャンパーの心を幾度となく傷つけたらしく、ブラックみーたんと呼ばれるときもあったが果たしてその正体はいかに…。

From しぇい

♦ぐっさん♦

My brother ぐっさん！！別の名を幼女キラーという。落とした女の子は数知れず。そして器用にも修羅場に巻き込まれた堂地由緒。笑　リマ（彼女）と遊んで夕食に戻ってこなかったときは晩御飯の具にしてやろうかと思いました。でもノリが良くてイジリ甲斐があってお酒に滅法強いぐっちゃんがホームステイパートナーですっごい楽しかったよ～ん☆　日本ではあんまり幼女に近づくと通報されるから気をつけてね＾＾

From　かんな

◊あっこ◊

芸人並のおもしろさとチェブラーシカの様な大きな耳で日本人、村人問わず常に周りを笑顔にしてくれたあっこ(^o^)オケラー！とサラマー！の2単語で滞在期間村人と会話していたあっこ(^o^)人のカメラで下からのアングルの自撮りを撮りまくる自撮りの神、あっこ(^o^)♡そんなあっこは小さな子供から歯抜けのおじちゃんにまで幅広く愛されてたね(^^)♡いつも笑わせてくれてありがとー♡それ以上酒やけボイスひどくならないようにね♡♡♡

From なつき

♦ネイビー♦

ゴバフェイス…ネイビーはみんなを笑わせてくれ、ときにはフィリピンが暑いからとみんなに気をつかって涼しく(寒く)してくれます。村人にはあまりうけなかった(笑)ゴーマッソー…私は好きだよ!そんなおもしろいネイビーもキャンプ中に体調を崩して死にそうな顔してたね。死ぬかと思ったとかを苦しそうに、でも笑顔で言うネイビー。もうほんとに無理しないでね。ネイビーはみんなのことを気遣うことのできるとても優しい心の持ち主です。ゴーマッソーが気になる人はぜひネイビーに言ってみせてもらってください(^^)優しい彼は快く披露してくれるはず!!

From あやな

♦しゅんや♦

キャンパーの中で一番の身長とルックスを持つ隼也。たまに毒づいたり、彼の言動で場がしらけることもあったけれど、実は涙もろい一面も！！最後の方はずっと泣いているイメージがあったけれど、それだけキャンプを愛していた証拠だね。大変な会計はもちろんのこと裏の記録係として何枚ものメモリーカードに沢山の思い出を残してくれた隼也にはキャンパーみんなが感謝しているよ。本当にありがとう！！

From みさき

11.感想

【かんな】

2011 年の夏、私は FIWC のワークキャンプに参加することを決めた。理由は自己成長のため。初めてのキャンプを終えて、そんな理由で参加したことを後悔した。なんてもったいないことをしたんだろう。次は本当の「ワークキャンプ」をするんだ、そう思って 2012 年の春にもう１度参加を決めた。今度は大満足･･･とまではいかないけど、納得できるキャンプができた。１つのキャンプが終わって、自分は「リーダー」がしたいと思った。先頭に立ってやれば、きっともっと違う世界が見れる、そう思ったから。2012 年夏、リーダーになって初めてのキャンプ。なんてうまくいかないんだろう、どうして私ばっかり･･･こんなことばかり思った。今までみたいに村人と話して、遊んで、楽しいはずなのに、心の底からそう思わない自分がいた。「リーダー」ってたくさん我慢しなきゃいけない。嫌なことばかり。なんでなったんだろう、もう辞めてしまいたい。この言葉をメンバーにこぼしたこともある。それでも、日本で、現地で、たくさんの人と会って、話して、考えて、悩んで、「私はリーダーなんだ」と、強く強く意識するようになった。

今回のキャンプは、村人と日本人、全員が主役。私はそのステージをつくる側。今までみたいに村人と自分が交流するだけじゃなくて、みんなが楽しむ姿を見るのが自分の幸せだった。一番嬉しかったことは、フェアウェルパーティで、日本人も現地人も、子供から大人までみーーーんなが泣いてたこと。それを見て「あー、いいキャンプができたんだなぁ。」と思った。私はしばらく泣けなかった。帰ることも、キャンプが終わることも実感できなかった。でもある女の子に話しかけたときに涙が溢れてきた。感動的な言葉でもなんでもない、毎日してたくだらないやりとり。これが明日からできなくなるんだと思ったら涙が止まらなかった。４回も行くと帰るのが当たり前になっていた。でも次のワークキャンプはもう無い。初めて行ったときの気持ち、行くたびに増えてく友達と家族、ワークが終わったときの感動、村人との当たり前の生活･･･いろいろなことを思い出して、泣いて泣いて泣きまくった。

サンドニシオでのキャンプは、今までで一番「キャンプ」を楽しめた。ここに辿り着くまで、きつかったし、大変だった。それでもがんばれたのは、ありきたりだけど周りの人のおかげ。いろーんな人にありがとうと言いたいけど、最後はやっぱり、メンバーのみんな、ありがとう。自分と同じくらい、もしくは自分以上にフィリピンキャンプが大好きな友達と出逢えたことが私は一番幸せです。またいつかみんなで帰って、ゆっくりしようね。

【しほ】

１年前にフィリピンキャンプに参加したとき、「自分が現地の人たちに何かしてあげていると言うより、むしろ沢山のものをもらってきているんだ」と強く感じた。村の人の温かさや心遣いが胸に響いたキャンプだった。その次の下見キャンプで evaluation をしたときは、村の人たちと話したり町並みが活気づいているのを見たりして、FIWC のワークキャンプの影響力を思い知った。自分で思っている以上に、私たちは良くも悪くも現地の人たちに多くの変化をもたらしているのだとその時実感した。そして今回のサンドニシオでのキャンプ。村の人たちは私たちを心から歓迎してくれた。朝っぱらから下ネタで盛り上がったり、エンドレスでアルプス一万尺をしたり、真夜中に大勢でだるまさんが転んだをしたり…。毎日毎晩、小さな子どもからおじさんやおばあちゃんまで、くだらない話をしては沢山笑い合った。ワークも本当に意欲的に取り組んでくれて、おかげでほんの数日で完成することができた。みんなでするバケツリレーやセメント作りが楽しくてたまらなかった。正直、あんなに立派な道が出来るなんて思っていなかったので今でも本当に驚いている。(笑) この１ヵ月を通して、私たちが現地の人たちから色んな感動をもらっているように、現地の人たちも同じことを感じているのだと思った。もちろん、私たちはあくまで村の人間ではないから、自分たちの気付かないところで多くの気遣いをしてもらっているし、不快感を与えてしまっていることもあったはずだ。それでも私たちのことを慕い、「次はいつ帰ってくるの？」といつも聞いてくれていたのは、私たちと過ごした時間が彼らにとってもそれだけ価値あるものだったからだと思う。日本に帰る数日前に、村のあるおじさんが「サンドニシオはいつでも FIWC のメンバーをとっても歓迎するよ。」と言っていた。私が笑うと、「だって君たちの家なんだから。」と、もう一人のおじさんが当たり前のように付け加えてくれた。私はそれが本当に本当に嬉しかった。きっとこれがワークキャンプの１番の魅力なんだろうな、と今では思う。

他のみんなも言っていたけど、このキャンプは本当に恵まれたキャンプだったと思う。天候に恵まれ無事にワークを終了することができたし、何よりも人に恵まれていた。村の人のキャンパーも、みんなが毎日楽しそうにしているのがとても嬉しかった。自分は今回、副リーダーとしてキャンプに参加したけど、それらしいことは何もできてないなと心底思った。みんなと同じように、自分もただ純粋にキャンプを楽しんでいた。こんな奴でごめん…(笑)とりあえず、本当に最高のキャンプだった！こんな風に思えるのも、キャンパー一人ひとりが見えないところでがんばってくれていたからだと思う。

最後にこの場を借りて、お礼を言いたい。今回からキャンプに参加したみんな、こんなに変人が集まるとは思ってもなかったけど、その個性と優しさのおかげ

で毎日すごく楽しかった！下見メンバーの皆、こんな変態と去年からずっと一緒にいてくれて本当にありがとう！特に、かんなとしぇいは日本にいるときからずっと、私たちの縁の下の力持ちになってくれていた。このメンバーでキャンプに行けて、本当に本当によかった。そして、サンドニシオの人々や、下見から沢山お世話になっているロクロクさんやダディたち、日本で国内係をしてくれていた僚平、心配ながらも快く送り出してくれていた家族や私の周りの人々にも、ありがとうだけでは伝えきれないくらい感謝している。私は本当に恵まれている。みんな大好きー！

【しぇい】

恩返しのキャンプ。フィリピンキャンプではいろいろ学ばせてもらった。何か返してあげたい。今までもらったものはたくさんある。あげたものもあるかもしれない。でも自分たちが一から作ったこのキャンプでなにか今までの感謝をしたい。その一番の方法はやはりワークの完成。それも最後まで仕上げて帰りたい。そう思って今回ワークリーダーとしてこのキャンプをむかえた。

Most peaceful camp 今回のキャンプをロクロクさんがこう評価してくれた。ワークに関してもほとんど問題はなかった。資材も問題なく届いた。バヤニハンも来てくれる。ワークも予定より早く進んでいる。問題がないことはいいことだ。でも何か胸につっかかえているものを感じた。それはワークリーダーとして自分がちゃんとできているのか、自分がいなくても進んでいるんじゃないかという不安だった。でもそれは違う。自分じゃなくてもいいとかが問題じゃない。みんなが支えてくれてる。どんなに自分がダメでもみんなが背中を押してくれてる。自分のあとをしっかりついてきてくれてる。その事実が一番支えになった。その期待に応えることが自分がワークリーダーとしてするべきことなんだと思った。と同時にこんな心強いメンバーたちに感謝の気持ちでいっぱいになった。

今回、道は完成した。国から予算が下りることも決定しもっとこの道は長くなる。下見のときにこの村でキャンプをすると決まった時からこの選択肢はあってたんだろうかと何回も思っていた。国の予算が下りるのなら FI がわざわざ介入してまでする必要はなかったんじゃないかとも思う。でもクヤレンモンドは礼を言ってくれた。「自分はドライバーだから道ができてとても助かる。ありがとう。ありがとう。」それは僕らのキャンプには過程があったからだと思う。この道を作るために一緒にいた時間。笑いあった日々。そういった村人もキャンパーも共有できる過程があったからこそこのキャンプは意味のあるものになったんだと思う。

フェアウェルパーティの日、ベンチに座って周りを見渡してみた。そこにはキャンパー

と村人が混ざり合って踊る姿、別れを泣いて惜しむ姿。素晴らしい景色だった。下見キャンプのときから自分たちが理想としていた風景がそこにはあった。そう思ったとき涙が止まらなくなった。声を出して泣いた。あんなに泣いたのは何年ぶりだろう。キャンプ前にかんなと約束していた。「フェアウェルの日はステージで号泣しような！」ステージではなかったけど、こんな風に泣けるなんて思わなかった。一年間頑張ってやってきたことが終わる。ものすごい達成感と少しの寂しさ。果たして恩返しはできたんだろうか。また恩をもらってしまったかもしれない。でもこのキャンプがいろんな人のきっかけになってくれればいいなと心から思う。

君を忘れない 曲がりくねった道をゆく　村から帰るとき何度も思った。フィリピンの山奥の田舎の村で僕たちは素晴らしい出会いをした。またこの道を通って帰ってきたい。
きっと想像した以上に騒がしい未来が僕を待ってる　サンドニシオに幸せな未来が待っていますように。　そして今までキャンプをするにあたって支えてくれたすべての人に。
Daghan Salamat.

【まーちゃん】

長い長い夢でも見ていたのではないか、と思う。一緒に過ごしたみんなの気持ちを考えると、そんなこと言ってはいけないのだが、日本との時間の流れる速さのギャップに、思わずそう感じてしまう。

私にとって２回目のフィリピンは、前回とは全く異なるものとなった。オルモックに着いたとき、あぁ帰ってきたな、と思った。前回よりも気持ちに余裕が持てていた。とはいえ、本キャンとしては今回が初めてで、ワークについては分からないことばかりだった。ワーク開始の前日にしぇいが不安がっているのを見て正直、どうしてそこまで、と疑問に思ったほどだった。そんな中での副ワークリーダーは、至らないところだらけだっただろう。それでも、日本人も現地人もみんなが一緒になってワークを進めている姿を見て、私も頑張らなくては、何かしなくてはと思った。私は、“みんなが楽しいワークづくり”がしたいとずっと思っていた。英語がほぼ話せず、普段は交流の手段がお酒くらいしかないタタイたちと、ワークを通してどれだけ交流できるか、と考えていた。しかし、いざワークが始まってみると、その目標は私が何をするまでもなく、既に達成されていた。

最終日のワークも終わりに近づいたとき、ある男の子が私に尋ねてきた。へい、この道はどこまで続くのか、と。そのとき私はどう答えたか、はっきり覚えていない。しかし心の奥がズキューンと打たれたことは確かに覚えている。今でもこの言葉を思い出すと、涙が出そうになる。もし今回の私たちのプロジェクトをきっかけに、あの道が

これからも村のみんなの手によって続いていったなら、どんなに嬉しいことだろう。これが実現したときに、私たちが現地に行き、みんなと共につくることの真の目的が達成されるのだと思う。

そして今回のキャンプでもう一つの目標として、私自身が成長したいと強く願っていた。というのも、下見キャンプでは他のメンバーに連れて行ってもらったという感覚が強かったからだ。今、向こうでの 1 か月間を振り返ったときに、言葉ではうまく表せないが、下見が終わったときとは全然違う感情を抱いている。もちろん前回同様、いやそれ以上にものすごく楽しかったのだが、なんとなく、自分の中で何かが変わったなと感じる。今回のキャンプで私が成長できたのなら、それは私が成長したのではなく、みんなに成長させてもらったのだと思う。

下見からお世話になった村のみんなに今回は私たちが恩返しをする番だと思っていたが、結局今回も、もらったものの方が遥かに多かった。そして今、一番強く思うこと。大好きなメンバーと、大好きな村でキャンプができて、私はほんまに幸せやなぁ

【あやな】

「大好き!!!」これが私のフィリピンに対する思いを一番表している言葉だと思う。下見メンバーとしてかかわってきた今回のキャンプ、何よりみんなで楽しんで初めてのキャンパーにも村を大好きになってほしかった。村に着いた日、村人みんなが大歓迎してくれた。会ったのは半年前だったのに子どもたちも名前を覚えていてくれた。とにかくみんなかわいい。ワーク中は青年やお父さんたちがたくさんいてはじめは名前も知らない人ばかりだったけれど一緒にワークをしながらおしゃべりをしてどんどん仲良くなっていった。ワークで疲れても休憩するのがもったいないくらい毎日がとてもとても楽しく村人やキャンパーと一緒にいられるのが嬉しかった。ただ歩いているだけでもちびっこからおじいちゃんおばあちゃんまでいろんな人が声をかけてくれた。昼間っからお酒を飲みながらジョークでいつも私たちを笑わせてくれた。「これは日本語でなんていうの?」とよく聞いてきて、たくさんの日本語を覚えて使ってくれた。そんな素敵な村人たちと一緒だったから私はいつも笑顔で過ごすことができた。キャンプ中何度もディスコをした。最初のディスコでは呼んでも来てくれなかったお父さんたちがだんだん一緒に踊ってくれるようになってフェアエルパーティーでは朝までみんなで踊った。日本に帰るのが悲しくて日本人が泣いていたとき DJ は日本人のために GANGNAM STYLE を流してくれた。キャンプ中何度踊ったかわからないくらいたくさん踊ってみんなで盛り上がった。キャンプ中に一番聞かれたのは「いつサンドニシオに戻ってくるの?」かもしれない。私たちがまだ日本に帰るのはまだ先のことだと思

っているうちから村人は私たちが日本に帰るのがさみしい。戻ってくることはできる?いつ戻ってくるの?と何度も聞いてきた。たぶん 2015 年かなと答えると、遠いねと悲しそうな顔に。本当に私たちのことを愛してくれているんだと感じた。私たちだけでなく、村人も心から楽しんでくれていて本当に嬉しかった。無事にワークが成功してできたあの道。Country road. サンドニシオ大好き!!!みんな私にとってかけがいのない存在だ。まだまだ遠い 2015 年だけど、絶対にサンドニシオに帰る!!その頃には子どもたちも少し大きくなっていたり、道ができたことによって村が発展していたりと様々な変化が見られるだろう。2015 年がとても楽しみだ。最後に一緒に過ごしたキャンパーのみんな大好き!!ありがとう。サンドニシオの村人みんな、キャンパー、そしてダディドドン、ロクロクさん Daghan salamat. I miss you all♡

【なつき】

1 年前のキャンプは“参加”する側だったが、今回のキャンプは“主催”する側。下見キャンプが終わって本キャンプに向けて準備が始まっていく中でいろいろなことを考えた。みんなしっかりしていてすごいなー。みんな英語できてすごいなー。みんなすごく頼りになるなー。それなのに自分は……他のメンバーに引け目ばかり感じていて、自分はフィリキャンに必要ないんじゃないか、自分よりもっとワークキャンプに参加するのにふさわしい人が居るんじゃないかと考える時が何度かあった。そんなことを考えると本キャンプが不安でたまらなかった。でも、その不安以上にキャンプに関わっていたいという気持ちが強く、自分が去年頼りにしていた人のように今回は頼りにされる立場なんだ、自分ができることを全力でやれば自然とキャンプに貢献できるはず！と何度も何度も自分に言い聞かせていた。そして、常に感謝の気持ちを忘れずに、一日一日を、一瞬一瞬を全力で楽しもう！と思いキャンプに臨んだ。

下見キャンプの survey でサンドニシオを訪れ、カピタンたちと話した時、正直あまり良い印象を受けなかった。バヤニハンはたくさん来てくれるのかな？村人たちは日本人に対して心を開いてくれ、マサバ村の人たちのように日本人を受け入れてくれるかな？と不安を感じていた。しかし今となってはそんな不安を抱いていた自分が馬鹿らしく感じる。ワークの時、バヤニハンの人たちは体を壊さないか心配になるくらい毎日一生懸命に働いてくれた。こんなに村人が頑張ってくれているのだから自分も頑張らなくちゃ、と逆にやる気を駆り立てられたほどである。（炎天下の中汗をかきながら働くバヤニハンの筋肉は素晴らしかった…。）ワーク以外の時間はお互いの国の言葉や遊びを教え合ったり歌を歌ったり…ひとりでゆっくりする時間が無いくらい、日本人も村人も毎晩門限ぎりぎりまで交流を

楽しんだ。村を歩くといたる所で楽しそうな話し声が聞こえ、村が毎日みんなの笑い声で溢れていた。Farewell party の時、村の子供も大人も日本人もみんなが泣いている姿を見てすごくうれしかった。自分自身も、驚くくらいに大泣きしていた。涙が溢れて止まらなかった。この時、日本人 16 人と村人が 1 ヶ月共に過ごして築きあげてきた絆の強さを改めて感じた。

サンドニシオで過ごした一日一日の思い出は私の一生の宝物になるだろう。最高の仲間、最高の村人と共に最高のワークキャンプができたことを本当に本当に幸せに思う。キャンパーのみんなや国内係のりょうへいさん、キャンプに携わってくださった方全ての人に対して感謝の気持ちでいっぱいです。

村人がワークした道を通るたび、モニュメントを見るたびに自分たち FIWC のことや一緒に過ごした日々を思い出してくれたらいいなと思う。絶対いつかみんなで帰ってソーラン節と江南スタイル踊ろう（^o^）

【はらちゃん】

“恩返しをしたい。”キャンプが始まる前の国内合宿でのしぇいの一言。この言葉に私はハッとなった。それまでの私は、なにかをしてあげに行くのではない、自分もたくさんのことを得てくるんだ！という意識が強すぎた。これも決して間違いではないと思う。でも、たくさんのことを学ばせてくれたこのフィリピンキャンプに何かを“返す”という考え方は私にとってすごく新鮮だったが、すごく共感できた。出国前のこの一言はキャンプ中の私にとっての大きなキーワードのひとつだった。

今回で 3 回目のフィリピン。ふとしたときに、初めての時に比べるとずいぶん慣れたなあ、と思うことがよくあった。でも、なつかしいことばかりではなかった。今回 3 回目にして初めて感じたこと、意識したことがたくさんあった。まず、出発前の緊張感が違った。下見からやってきた自分たちのキャンプである、そして最後のキャンプであるという気負い。キャンプが成功するだろうか、自分が何かやらかさないだろうかという不安。福岡空港ではこれを隠すのに必死だった(笑)現地では、自分たちが侵入者であることを強く感じた。村人の就寝時間、ごはん、バスケットコート、ステイ中の部屋…様々なところで村のみんなの私たちに対する気遣いや我慢が見えた。普段はこうじゃないんだろうな、と思うことが多かった。良くも悪くも私たちは村人に非日常をもたらしているのだと改めて感じた。また、ワークへの思い入れも違った。橋は、順調にワークが進みすごく早く完成した。私たちが帰るころには車もバイクもたくさん通って、泥で汚れてずっと前からあるみたいにすっかり馴染んでいた。自分たちが作ったものが村の一部になっていく、みんなが当たり

前のようにあの上を歩いたりバイクで通ったりしていくのがこんなに嬉しいとは思わなかった。そして通るときについでに私たちを思い出してくれたらなお嬉しい(^^)それから、ロクロクさんという存在の大きさを改めて感じた。ロクロクさんは私たちがどんな存在なのか、現地人の中で一番、むしろ日本人よりも深く理解してくれている。私たちの大事なお父さんだ。これまでにこんな関係を築いてきてくれた歴代キャンパーの方々にも心から感謝したい。体調のことがすごく心配だが、ロクロクさんにはいつまでもいつまでも元気でいてもらいたい。

帰国してもう四週間。みんなは元気かな、今頃何してるかな。今でも毎日フィリピンでの日々、村のみんなのことを想う。あんなに別れが悲しかったのは人生で初めてかもしれない。この FI 九州のフィリピンキャンプは私にたくさんのことを教えてくれた。キャンプを通してたくさんのものを得た。全部大切で大好きで一生忘れたくない、手放したくないと思うものばかりだ。私は今回のキャンプで“恩返し”ができただろうか。自分のしたことがほんの少しでもいいからこのキャンプ、そしてこれから続いていくキャンプにプラスに働いていたらいいな。キャンパーのみんなに、ロクロクさんに、サンドニシオのみんなに、国内係のりょーへーに、FI の先輩方に、3 度もフィリピンに行くことを許してくれた両親に、たくさんの人に感謝、感謝、感謝だ。Salamat kaayo!!

こんなことできるなんて私ってほんっっっっと幸せ者だ＼(^^)／

【なお】

去年で終わりにしようと思っていたワークキャンプ。それなのに夏の下見キャンプにも行きたくてたまらなかったし、魅力を知っているからこそ先発として少しでも長くフィリピンで過ごしたかった。そう考えると悔しいから、無理矢理自分の中で割り切っていたし、実際部活で忙しくてぎりぎりまで参加を悩んだ。しかし３月１日から３月２１日までの最高の３週間を終えて、そんな思いを持っていた自分が馬鹿らしく感じられる。リーダーかからのキャンパーと村人を繋いでほしいというお言葉、自分なりに考えた下見キャンパーと新キャンパー、先発と本隊を繋ぐという貢献の仕方もいつの間にか忘れ、思いっきり楽しんでいた(笑)。そもそも私がそんなことをがんばらなくても、気が付けばキャンパーと村人は家族になる。自分が楽しむことで、周りも笑顔になるし、誰かが楽しむことで私も笑顔になる。子どもと走り回り、青年と冗談を言い合い、おじちゃんとお酒を飲んでふざけて、雑談しながらおばちゃんからおいしいものをごちそうになる。英語をほとんど話さないおじいちゃんおばあちゃんともビサヤ語のあいさつを交わすだけで優しい気持ちになれる。かけがえのない一瞬一瞬をキャンパーと共に毎日全力で楽しんだ。２回目のワークキャンプで、ワークキャンプの魅力は人とのつながりや触れ合いを大切にして、人の温かさを感じることだと再確認できた。サンドニシオは日本のように便利なＳＮＳや電子機器が普及しているわけではない。しかし、毎日いろんな場所に多くの人が集まり笑顔で溢れている。日本人だけでなく村人だけでもなく、みんなが楽しんでいてとても嬉しかった。

物質的な豊かさだけで幸せをはかることはできないと強く感じた。

村人とキャンパー、ひとりひとりが少しずつ他人を思いやる気持ちがワークキャンプを成功に導いたのだと思う。暑い中重いものを運ぶ作業も一生懸命働く村人や他のキャンパーを見ると、自分も頑張ろうと思えた。ふざけあってテンションをあげることできついよりも楽しいという感情の方が大きかった。橋を完成させたいというひとつの同じ目標に向かって全員で進めていく毎日のワークは本当に充実していたし、完成した橋を見渡すと、とても清々しくて大きな達成感を味わうことができた。普段の生活からは村人が私たちを大切に思ってくれていることが痛いほど伝わってきたし、私たちが気づかないところでもたくさん気遣ってくれていただろう。キャンパー同士もお互いに助け合って過ごすことで平和なワークキャンプになった。

このように、とにかく村人との交流を楽しんで毎日全力で過ごしてきたわけだが、このワークキャンプで自分に何ができたかわからない。サンドニシオの人々からもらったものの方が多いかもしれない。しかし、お互いにもう一度会いたくてたまらない大切な人たちができたという事実は変わらないし、この３週間の思い出が色あせることはない。村人も日本人も心の温まる幸せな３週間を過ごしたことは確かだ。私の宝物がまた増えた。サンドニシオの人々の笑顔を今でも思い描くことができるし、Farewell party でかけてもらったたくさんの「ありがとう」や「帰ってきてね」という言葉を思い出すと、あんなに号泣したのに今だに涙が出そうになる。

フィリピンに送り出してくれた家族や周りの人々、ロクロクさん、ダディドドン、りょうさん、国内係のりょうへいさんをはじめとしてこの環境を整えてくださったＯＢ、ＯＧの方々に感謝しています！そして、キャンパーのみんな！大好き！本当にありがとうこれからもよろしく！またみんなでサンドニシオに帰ろうね！サンドニシオ、Daghan Salamat（^0^）♡

【あきお】

今回のフィリピンキャンプは自分にとって初めての海外だった。異国の土地で言葉も上手く伝わらない環境で一か月生活することは、正直楽しみよりも不安の方が大きかった。キャンプに行こうと思った理由もボランティアに興味があり、大学生のうちにしかできないことをやっておこうと言った軽い理由であった。ところが、空港でりょうへいさんから頂いた手紙に書かれていた「キャンプをよくするには常に思考すること」と書かれた手紙を読んでキャンプに対する気持ちが変わった。フィリピンに着いた時から日本で体験できることは少ないんだから良いことも悪いことも吸収してキャンプがより良くなるためにし

ようと考えた。最初、自分が考えていたボランティアとは自分が人のために何かをしてあげる事だと思っていた。だから、他人から偽善と思われることは当然だと思う。その理由もあって、友達にフィリピンに行ってくると言うことに抵抗を感じていた。口では現地のためにワークをしてくるとか言っていたが、ほんとは自分自身が行きたいだけの自己満足だった気がする。でも、実際キャンプが始まると逆に向こうから目には見えない何かをたくさんもらってきた気がする。現地での生活を過ごしていくにつれて自己満足の為ではなく、村人が楽しく、快適に生活できるようにとワークで日頃の恩を返そうと思えた。毎日遊んで、働いて、食べて、飲んで、踊って、笑って、ずっと昔から友達だったかのように思えて心の底から楽しかったと言える一か月間だった。私は、英語もビサヤ語も日本語もきちんと話せないが、サンドニシオの村人と言語の壁を越えて仲良くなれたことは私のこれからの人生にかけがえのない宝物を与えてくれた。サンドニシオの村人はもちろんだが、今回のキャンプに一緒に行った 16 人には感謝している。最初は不安しかなかったがメンバーのおかげで楽しいキャンプを過ごすことができた。今回のキャンプがこの１６人で行く最初で最後のキャンプだったが、またいつか全員でサンドニシオ行きたいと思う。最後にこのキャンプに関わってくれた人たちみんなに心から感謝している。Daghan salamat!!!!!!

【てぃもん】

今回のワークキャンプは、自分にとって初めての海外、そして初めてのフィリピンキャンプであった。FIWC に関わりだした当初、ボランティアや世界の貧困といわれても、さほど興味もなく、フィリピンに行くということを全く想像することができなかった。しかし、先輩方や FIWC に関わることで知った人々との出会いによって、それらに対する興味や考え方も変わり、フィリピンに行ってみようと思い、参加するまでに至った。初めは、知らない言語、知らない文化、知らない人々の中で生活することに不安もあったが、その中で自分はどれだけやっていくことができるのかという好奇心もあった。実際行ってみると、自分がボランティアという言葉から連想していた「一方が相手に利益を無性で与える」というものとは全く異なり、ボランティアをしに行った自分たちに対して、たくさんのおいしいご飯の提供や、積極的に仲良くなろうと声をかけてくれる人々など、日本の社会ではあまり味わうことのなかった、濃い人間関係も経験し、「Give and Take　というよりも A little give　More Take」という風に感じるほどだった。中でも自分が体調を崩したときや、足を怪我してしまったときに多くの人が、自分のことのように心配してくれたり、手を貸してくれたり、たくさんの優しさに触れた。また、ワークでも日本人キャンパーの働

きよりも村の人々のほうがたくさんの仕事をこなしている中、完成した橋を背に「素晴らしい橋を作ってくれてありがとう」と握手を交わした時、本当にこの橋を作ってよかったと涙が出そうになった。また日本人の生活と違って村の人たちは早寝であったため、自分たちの一か月の滞在はその生活リズムを変えるものだったが、村の青年たちは夜遅くまで自分たちとの交流を楽しんでくれて、「君たちが来てくれたことが幸せ」という言葉にこちらも幸せを感じた。

このキャンプを通して一番感じたことは「人と人とのつながり」であると思う。今回のキャンプテーマでもある「つなぐ ~country road~」。ワークによって橋を作ることで、川で隔たれていた道はつながり、ともに過ごす楽しい日々の中で、文化、国籍の違いをつなぎ、自分とサンドニシオの村人との心もつなぐことができた。FIWC に関わっていなければ、決して体験することができなかった特別な一か月。こんな素敵な一か月を過ごすことができたことを、生活を共にしたキャンプメンバー、サンドニシオの村人たち、また支えてくれた FIWC の皆さんに感謝したいと思う。そして、これからもこのようにして生まれたつながり、その道を決して途切れることがないように大切にしていきたい。

【せいじゅ】

自分は今回のキャンプで、初めて日本を離れて外国に行った。しかし出発前は、不思議と不安はなかった。それはおそらく、下見メンバーや去年のキャンパーから色々と話を聞いていたからだと思う。みんな口をそろえて、フィリピンは「楽しい」「また行きたい」と言っていて、楽しみでしかなかった。

実際フィリピンに行ってみて、自分には何もかもが新鮮な毎日だった。まず空港でフィリピンの土地に降り立った時の、言葉では言い表せない空気のにおいや、もわっとした感じ。日本とはまるで違い、フィリピンについに来たんだと強く感じた。村では、子供たちと遊んだり、青年たちと冗談を言い合ったり、大人の人たちとお酒を飲んだりと、1日1日が本当に楽しかった。食べ物も、日本にあるような野菜や肉から、今回のキャンプで初めて食べるものなど、毎日いろいろなものを食べた。特に、ワークの休憩のときに飲むヤシの実は、甘くてすごく好きだった。

この一か月フィリピンで生活をして、ボランティアとワークキャンプの違いが少し分かった。フィリピンに行く前は、正直 違いなんてほとんどないと思っていたが、実際にフィリピンに行ってみると、ご飯を作ってもらったり、寝床を提供してもらったり、ワーク時には自分たちの何倍も働いたりと、こっちが与えること以上にたくさん

のことをしてもらい、逆にこっちがもらっていることの方が多く感じた。一緒にご飯を食べ、一緒に働いて、一緒にお酒を飲む。日本人だけでなく、フィリピン人だけでもなく、一緒に作り上げていく。これがワークキャンプなのだと思った。現地の人と交流し友達になって、ワークをする。この一か月はまさに Friend International Work Camp だった。言語が違い言葉が分からなくても、鬼ごっこをしたりバスケットをしたりワークをしたりしているうちに、自然と仲良くなっていったし、ホームステイ先の家族とも、本当の家族のようになれた。フィリピン人の心の温かさがあったからこそ、こんなにも自然に親しくなれたのだと思う。

自分のこの一か月は多くの人に支えられた一か月だった。初めてで右も左も分からない自分に色々と教えてくれた先輩キャンパーに支えられ、つらいときに助けてくれた他のメンバーに支えられ、重い荷物を持ってくれたり料理を作ってくれた現地の人たちに支えられ、そして、この貴重なキャンプに行かせてくれた親にも支えてもらった。他にも、ここには書ききれないくらい多くの面で、周りの人に助けてもらった。これらの支えがなかったら、このキャンプは自分にとって大切なものになっていなかったと思う。本当にありがとうございました。

【みさき】

「学生みんなで一つのことをやりたい」それが私がこのキャンプに参加した理由。キャンプに参加したいという思いが強くて、行けることが決まった日から、はりきって筋トレを始めたほどだ。そして実際に参加してみて行く前に想像していたよりも数十倍楽しかった！村には車もほとんど走っておらず、建物だって小さいものばかり。でもとにかくにぎやかでいつも子供が外で遊んでいた。初日の夜は村人やキャンパーのテンションについていけるか不安でリーダーの前でこっそり泣いた。でも翌日にはその不安も吹き飛んだ。とにかくみんなが優しくて、あたたかくて、おもしろくて。私が一歩外に出たら村人たちが「みさき～」って仲間に入れてくれる。おじさん達が毎日楽しそうにお酒を飲んでいて近くを通ったら誘ってくれる。他にも中途半端な時間から鶏に起こされたり、皿を洗っていたら牛を連れたおじさんが歩いていたり…。そんな日常、日本では経験したことがない。小さい頃に「いつか有名人になって世界ウルルン滞在記にでる」って夢見ていたけれど、有名人にならなくても私はウルルン気分になれた(笑)。何よりも子供がかわいい！追いかけるだけで喜んでくれるし、いつも笑顔で話しかけてくれる。どこかで摘んできたお花をプレゼントしてくれた時は本当にうれしかった(あとでバランガイホールが花だらけになったけれど)！子供たちはみんな心がゆたかでキラキラしてる！！

そして、キャンプの最大の目的であるワーク。炎天下の中、石や砂を運んだり混ぜたり、そして運んだり混ぜたり。大変だったけれど子供たちと一緒に運んだり、おじさんを応援したりしていると「嫌だな」なんて一度も思わなかった。バケツリレーをしているときはみんなで一つになっている感じがして最高の気分だった。私は後発隊だったので最初の全く何もない姿は見ていなかったけれど、ワークが全て終わってハバルが普通に通っているところを見ていると、「この数週間で何もない所から橋が完成するなんてすごすぎる」と言葉にはできないほどの喜びがあふれてきた。そしてそれと同時に毎日一緒働いてくれた村人たちに感謝の気持ちでいっぱいになった。

このキャンプを通して私は沢山のことを学んだ。絶対にお金では得られないものを沢山手に入れたと思う。ホームステイも経験して現地の生活を生で体感できたと思う。また村人との交流はもちろんのこと、キャンパーとも深い話をたくさんできた。何も決まっていないゼロの状態からワーク地を決めたり、ワークの流れを考えたりしてくれた下見メンバーは本当にすごいなって思った。私は初めてのキャンプで何もわからない状態でただみんなについていくことに必死だったけれどリーダーをはじめキャンパー達みんながキャンプを成功させるためにそれぞれ頑張っている姿を見てとても刺激を受けた。私もこのキャンプで少しでもみんなの役に立てていたらいいなと切実に思う。

最後にこのキャンプが成功したのは沢山の人たちの協力のおかげです。私が会ったこともない人も沢山支えてくれたと思います。この場を借りてお礼をいいたいです。本当にありがとうございました。サンドニシオのみんな！大好きです。そしてキャンパーのみんな！本当に大好きです。ありがとう。一生の宝物ができました。

【ぐっさん】

とても充実した３週間だった。初めての海外が今回のキャンプだったので、正直行く前は期待よりも不安の方が多く、現地の人としっかりコミュニケーションとれるだろうか、いつもと違う生活に対応できるだろうかと心配していた。しかしそのすべての不安は村に到着した直後にすべて解消された。村の人はとても温かく歓迎してくれて、自分もどんどん打ち解けることができた。時には体調を崩す場面もあったが、他のキャンパーがいつも気にかけてくれたの

で、申し訳ない気持ちもあったがとても安心できた。夕方まで現地の人と交流しながらワークをして、夜は子供たちとディスコ。さらに毎回おいしい料理を食べさせてもらい不便ない生活が出来たと思う。たくさんの思い出がありすぎてここでは全部言えないってくらい楽しかった。こんな充実した３週間を過ごすことができたのは、一緒に生活した村の人たち、そして何よりいつも自分を支えてくれた信頼できるキャンパーたちのおかげだと思っている。ほんとに感謝したい。また今回のキャンプの中で自分はさまざまな経験をすることが出来たし、考え方の変わることも多くあった。これをきっかけにして今後も何かできたらと思う。まずはまた下見も参加して、今回は他の人に引っ張ってもらうことが多いキャンプだったと自分自身思ったので、次回は自分が引っ張っていけるよう頑張りたい。

【あっこ】

大学２年生になり『何か今しかできないことを、そしてどうせするなら人のためになることをしたい！』そんな単純な思いで私はフィリピンキャンプに参加することになったが、出発前はフィリピンの事も、キャンパーの事もまだよく知らない状態ですごく不安でいっぱいだった。いざフィリピンにつくとすべてが新鮮で衝撃的で、見るものすべてにいちいち驚いては感動する、その繰り返し。サンドニオ村に到着し、初めは村人とどうやって交流すればいいのか不安だったが、先発隊のみんなの支えもあって、いつの間にか子供から大人まで仲良くなれていた。文化や身分や環境もやはり日本と村では違うが、英語がほっとんどできない私でもアコシアコー！と自己紹介するだけで笑ってくれるし、オケラー！とサラマー！の二言で何とか会話できたし(笑)、時間があればみんなで集まって話したり、歌ったり、ディスコで踊ったり、昼間からお酒のんだり、一緒にワークしたり、ずっと笑いあっていて村での生活は「楽しかった」の一言では伝えられないぐらい濃くてかけがえのない毎日だった。そんな村での日々の中で気づかされた事が多々あった。日本でのあたりまえの生活のありがたみ。村人の人としての優しさ。価値観の違い。自分の今までの考え方や視野がせまかったということ。ボランティアというものは、一方的に提供するものではなく得るものの方が圧倒的に多いということ。今挙げたようなことは、ありきたりだし日本にいた時も分かっていた事だけど、やはり実際に村に足を運んで肌で感じてきたという事が何よりも重要だったと思う。今回のキャンプテーマである「つなぐ～CountryRoad」。ワークは無事成功し立派な道になったが、あの道は村人だけでも逆に日本人だけでも作り上げる事は決してできなかったであろう。両者があって協力しあったからこそできた道であり、あの道こそが村人と日本人の心のつながりを象徴としているような気がする。だからこそ、

これからの世代へとあの道のワークがつながっていったら嬉しい。ワークキャンプに参加できて本当に本当によかった！今でも目をつぶると子供たちのキラッキラした笑顔や笑い声が浮かんでくる！第二の故郷になったサンドニオ村に絶対帰りたい！また、こんな思いができたのは、かんなやちょーちゃんをはじめ最高のキャンパーに恵まれ、りょうへいさんなどキャンプに関わってくれたすべての人の支えがあったからです！本当にありがとうございました！！

【ネイビー】

自分がフィリピンに来たのは今回で２回目。元々国際協力に興味があって１年生の夏にスタディーツアーでマニラを訪問した。そこで見たのは自分ではどうすることもできないような大きな、たくさんの問題。このままじゃいかんよなー、これからもフィリピンに関わっていきたいなーと思っていたときにこの団体に出会った。ただキャンプに行く直前まで自分が感じていたのは、マニラで見てきたものに対する答えを見つけることができていないままな自分の無力さ。もしかしたら自分にできることはほとんどないんじゃないだろうか。「向こうの人になんで来たの？って聞かれたらどう答える？」と出発する前に問いかけてきたてぇいの言葉が今も心に残っている。だから自分はキャンプでせめて周りの人を笑顔にしていこう。日本人、フィリピン人問わず自分とかかわるすべての人にとってこの３週間、１ヶ月が最高の経験になるように手伝いをしよう。と考えていた。逆に、自分にはそれしかできないと思っていた。

とかなんとかいろいろ難しいことも考えてたんだけど、実際行ってみた感想。めっちゃたーーーーのしーーーーーー笑。土とか小石を頭に乗っけてがっちゃがっちゃ運ぶのも、家族、キャンパーと過ごす食事も、おっちゃんおばちゃんに酒飲まされるのも、向こうの子にくせぇ。顔壊れてるね。と馬鹿にされるのもぜーーーーんぶ楽しかった!!最初はやばかった。日本じゃ結構笑ってくれる鉄板ネタのキン肉マン。ありえんぐらいすべった。やべぇ。俺バリカン持ってきたから坊主にするぜ！って現地人に言ったら冷静に「are you crazy? 」って言われた。あれ？うけてない、なんか心配されてる。やべぇ。でも時間が経つにつれ笑ってくれる人を増えたし坊主もはやった！笑。向こうの人とたくさん話したしたくさん遊んだ。たくさん働いてたくさん笑って最後はたくさん泣いて…フィリピンで過ごしたような時間は自分にとってあこがれだったし、昔から夢見ていたものだったんだなと帰ってきて気づいた。

自分がしたことはたぶん目の前のことに全力で取り組んだことだけ。自分としては今までにない最高の経験をすることができて本当に本当によかったと思う。

同時に考えないといけないのは周りへの感謝。自分が悩むことなく目の前のことに全力で取り組むことができたのは下見メンバーやロクロクさん、ダディが長い時間をかけてその舞台を用意してくれたから。村の人々や国内係、家族の協力がなければこの経験はできなかった。そして、自分はキャンパーがいなかったら生きて帰ることすらできなかったんじゃないかって思う。自分は目の前のことしか考えてなくて、体調管理がうまくいかず一度死にそうな思いをした。周りのキャンパーや現地人が心配してくれるのが心の底からうれしくて、やっぱり申し訳なかった。自分が元気に笑えば周りの人も笑ってくれるし、一緒に楽しい時間を過ごすことができる。無理をしなくてもそれだけでいいんだと思った。

フィリピンで過ごした３週間は一生忘れることのない大切な宝物。サンドニシオでのワークは多くの人の助けになるはず。自分は非力かもしれないけど、決して無力ではないと感じることができた。キャンパーや村人、ロクロクさんにダディ！みんなありがとう！

【しゅんや】

自分にとって初めてのフィリピンキャンプ。全てが初めてのことで正直行く前は不安でしかなかった。人と仲良くなるのに時間がかかる性格でメンバーにもなかなか心を開けないし、フィリピンの村人と仲良くなれるのかなど、どうしようか途方にくれたままフィリピンキャンプ当日をむかえた。普通なら、この後「けど、フィリピンに行ってみたら違いました。」ってなるパターンだけど実際にはそうはいかず、後発のメンバーとはすぐに仲良くなったものの、いざサンドニシオに着いたら凄いテンションの村人たちとウーーーイェーってなっている先発メンバーが出迎えてくれて、みんなに会えた嬉しさ半分とここでやっていけるのかという不安半分の気持ちを抱いたままバランガイホールに入ったのを覚えている。その日はずっとカメラとお酒の力で子供たちや村人とコミュニケーションをとった。そんな不安な気持ちも２、３日すれば自然となくなってメンバーたちとも壁が無くなり、ここから自分のホントのフィリピンキャンプが始まった。それから一緒にワークしたり、下品なこといって笑いあったり、はないちもんめやだるまさんがころんだ、アルプスいちまんじゃくといった日本の遊びをエターナルでたくさんしたり、みんなでギターを弾くしぇいを囲んでチェリーを歌ったり、夜中に available の日本人みんなで現地の女性から恋愛について学んだりいろんなことした。そのフィリピンでの全てが自分にとって最高の宝物。子供たちが自分に「あれしよう、これやって」って笑顔で言ってきてくれると自分を必要としてくれているようで嬉しかった。けど、毎日同じ遊びでめんどうくさいなと思い「無理無理」といって子どもたちを

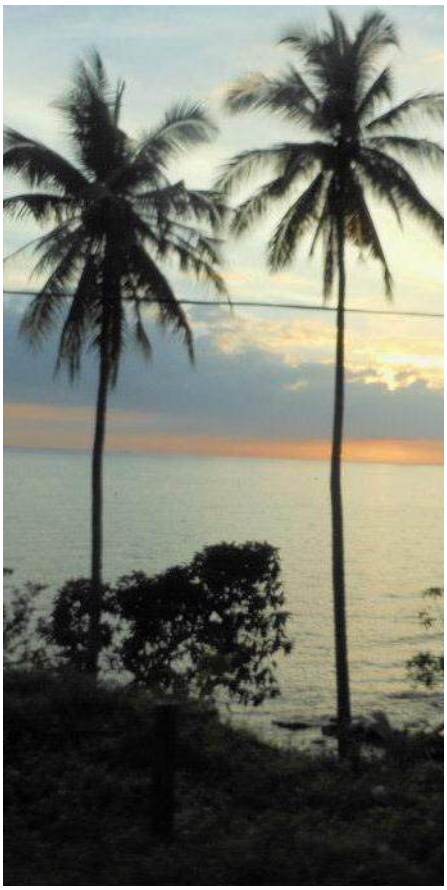
遠ざけてしまったことを今では後悔している。

ホームステイ最終日とフェアウェルの日、最後の別れの朝と周りがひくほど号泣した。あだ名が泣き虫ってなるくらい、自分でも気持ち悪いと思うくらい泣いた。けど、それくらいサンドニシオの村人と別れたくなかった。あの子供たちの無邪気な笑顔、毎日汗を流しながら頑張ったワーク、やるのが嫌だったはないちもんめもできなくなるって考えたら涙が止まらなかった。フェアウェルの日に自分たちのために泣いてくれる子供たちや大人たち。たった 3 週間しか一緒にいられなかったけどこんなに強い絆ができるとは思わなかった。メンバー16 人やこのフィリピンキャンプに携わった全ての人に感謝を伝えたい。1 人 1 人個性豊かなメンバー。フィリピンで 16 人一緒に生活して迷惑かけたことたくさんあるけど、ワークも無事に終わり、毎日仲良く笑って生活できたのはみんなのお陰。ありがとう。

そして 3 週間終わって思うけど、フィリピンって最高だ!!! 1 年前にたまたま学校のポスターを見て参加した報告会。偶然だけどその偶然のお陰で 16 人のキャンパーやサンドニシオの村人たちに出会えたと思うとあの時勇気だして報告会に行ってよかったと思う。あの時の自分よくやった!!!　サンドニシオの人たちとはしばしのお別れだけど、またいつかみんなで帰ってたわいもない話をしてワイワイ騒ごう!!!

参加メンバー

岩辺　かんな(西南大 3 年) : リーダー
長　志保　(西南大 3 年) : 副リーダー
浦田　菖平　(九州大 3 年) : ワークリーダー
宮崎　真緒　(九州大 2 年) : ワーク副リーダー
松永　彩菜　(九州大 3 年) : イベントリーダー
神尾　夏季　(西南大 3 年) : イベント副リーダー
大塚　康平　(九州大 3 年) : イベント係
山口　航平　(九州大 2 年) :　〃
福本　拓也　(福教大 3 年) : 保健&T シャツ係
東郷　瑛　(福岡大 2 年) :　〃
陣内　美咲　(西南大 2 年) : KP
川島　亜紀子(福岡大 3 年) :　〃
沖野　隼也　(九州大 3 年) : 会計
工藤　星授　(九州大 2 年) :　〃
堂地　由緒　(西南大 3 年) : 記録&ホームステイ係
原　美咲　(九州大 3 年) :　〃



FIWC 九州（代表：浦田 菖平）
Mail: fiwcq@hotmail.com
Web: http://fiwckyushu.web.fc2.com/ （FIWC 九州公式サイト）
Twitter:@fiwckyushu
Blog: http://fiwcqp.exblog.jp/(フィリピンキャンプ最新情報)